まほらに候　―綴命記第5章―

ろく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まほらに候　―綴命記第５章―

【Ｎコード】
Ｎ５１４０Ｗ

【作者名】
ろく

【あらすじ】
玻璃の里の民は、口を揃えて皆言った。
「この里はとても良い里。何一つ不満などございません」綴命記第５章。※若干の暴力・流血・差別表現を含みます。

1　華芸町にて

一

華芸町は騒然としていた。普段は香具師たちが華やがす賑やかな界隈だが、今は物騒な空気が立ち込めている。

あちらこちらに瑠璃治安維持部隊乾第壱班の、濃灰色の制服が見えた。野次馬を押し返そうと悶着している姿も見える。

壱班の手にする赤提灯に行きかう人々の影が大きく揺らめき、妙に不安を煽るようだった。

橘莉功はどよめく人ごみを掻き分けつつ、騒動の中心へと向かっていた。

「待て、ここから先は……っ」

垣となっていた壱班の男が言いさして、はっとした面持ちになった。

「す、すみません！　部隊長殿！」

「しーっ。今の俺はただの一般人です」

莉功は現在、壱班の制服を身につけていない。薄物の着流し姿だ。

「いや、しかし、だとすれば、その、中には……」

「じゃ、帽子借りるわ」

ひょい、と莉功は彼の被っていた制帽を奪った。彼は慌てた様子だったが、やがて仕方ないといった顔をして、野次馬の整理に戻った。

奪った制帽を目深に被る。手早く襷をかけ、莉功は中心に立つ同僚に軽く手を振った。

三宅彰司は頷き、目顔で足元の死体を示してみせる。

血の臭気に、莉功は思わず顔を顰めた。職業柄慣れたものではあるが、それでもやはり心地良いものではない。

提灯の灯りに照らされる死体の顔を、莉功は腕を組んで見おろし

た。
二人とも青年だ。二十を幾つか過ぎたくらいだろうか。
一人は、顔を上下に真二つに分かつようにして斬り殺されていた。どろどろと溢れ出した血だの脳漿だのが、ぽっかりと空いた口にまで流れ込み、死相を赤黒く染め上げている。
もう一人は、腹を刺されて死んでいた。やや小太り気味の腹から柄が生えている。手には小刀を握り締めていた。
まだ血は乾いておらず、生々しい色を残したままだ。つい先程まで二人は生きて、動いていたのだろうと思われる。
「んー……、アレだわ。小物大将の腰ぎんちゃく」
「小物大将？」
「俺がつけたあだ名」
怪訝な顔をして聞き返してくる彰司に、莉功はわざとはぐらかすようにして答える。彰司は無言のまま、莉功の足の甲をダンと踏みつけた。
「……っいってえ！　おま、思っきし踏むなよ！！」
莉功はぴょんと跳び上がり、踏まれた足を涙目で庇う。制服の長靴（ブーツ）で草履の素足を踏まれる衝撃を、彰司は分かっていてやっているのだろうか。
「お前が悪い」
恨みがましい莉功の視線を物ともせず、彰司は苛立ちに尖った声音で言った。長い前髪の隙間から暗い視線を送ってくる。
「もー、睨むなって。お前ただでさえ目に光なくて怖いんだから」
「うるさい。良いから早く話せよ」
「槙の腰ぎんちゃくだよ」
「……探していた相手ってわけか」
「ああ。見事に召されてらっしゃるなあ」
少しばかり前、まだ月が夜に浸かり始めた頃合の事だ。槙という男が死んだ。最近愛染街を騒がしていた荒くれ者だった。
その槙が死んだ際、腰ぎんちゃく二人も側にいた。が、彼らはそ

の場から立ち去った。怯えたのか仲間を呼びに行ったのかは知れない。
莉功たち乾壱班は彼らを探していた。重要な参考人だ。
そしてその場にはもう一人、少年がいた。莉功たちと同じく、治安維持部隊の者だ。といっても彼は莉功たち壱班とは違い、特警と通称される武力特化された弐班の者である。彼らは有事以外は壱班と共に行動する事が多いので、莉功たちとも馴染みが深い。
また彼は、莉功も組みする鳥獣隊一員でもある。鳥獣隊とは瑠璃の里の跡継ぎ様である如月由月の、爪牙でもあり耳目でもある極秘部隊の者達の事だ。
この事は、彰司は知らない。莉功が鳥獣隊の一員である事も。弐班の彼がその実、昼行灯とも呼ばれる如月の次男坊である事も。
件の彼は、今頃壱班の保護舎で治療を受けているはずだ。
「しっかし、何があったんだろうねえ」
莉功は汗でずり下がってきた眼鏡を指先で押し上げる。彰司は爪先で軽く地面をとんとんと叩いていた。考えている時の彼の癖だ。
「……まず、甲が乙の腹を刺す。逆上した乙が甲の顔を斬りつける。乙はそのまま腹の小刀を抜く間もなく死んだ。……かな」
「ま、そんな感じだわな」
乙の方は、手に小刀を持ったまま果てている。側にはその鞘があった。二人が作り出した血だまりには、金貨と何かの包み紙が落ちている。
甲の側に落ちている金貨の枚数は、どうにも乙の側の金貨より少ないらしい。もめた原因はこれだろうか。
「でもさあ」
裾が血だまりに触れぬよう尻を端折り、莉功は甲の顔の側にしゃがみ込む。
「ただの荒くれおばかさんが、こんなに綺麗に斬れるもんかね」
それに、と乙へと視線を移した。
「こっちも。見た感じ、腹の傷一撃で死んでる。殺しに慣れてる感

がさあ、半端ねえと思わん？」
　彰司はフンと鼻を鳴らした。お前に言われるまでもない、と言いたげだ。
「お前の言いたいように、仮に第三者が犯人だったとしても、捜査はされないだろうな」
「だろうねえ」
　二人相打ちでけりのつく話だ。いるかいないか分からない第三者を探す人員を、嫌われ者の荒くれ者の為にわざわざ割くほど、壱班は綺麗でも優しくもない。
「それにしても、こんな芸当ができる人間……」
　顔面を真二つにされた甲を見おろし、彰司が呟く。とんとんと地面を叩いていた爪先はやがて止まった。立ち上がった莉功を彰司はちらりと見てくる。
　おそらく、思い浮かべた相手は同じだ。
「……紫呉君の傷の具合はどうなんだ」
「あ、彰司んとこにも連絡いってたのな。……んー、俺も来る途中にちらっと見ただけだからなあ」
　今ここにこうして壱班が集っているのは、彼のおかげでもあった。
　紫呉の指笛を聞きつけ、付近の住民が駆けつけた。聞いたところ、喧嘩のような物音はずっと続いていたらしい。だが酔漢の喧嘩だろうと思い、放っておいたとの事だ。
　だがその後に続く、甲高い指笛が尋常な様子ではなかった。絶え間なく続くそれを不審に思い外に出ると怪我人を発見し、慌てて壱班を呼びに走った。そして集った壱班が周囲を警邏している最中、二人の死体を発見した、という次第だ。
「まあ、遠目に見た感じ芳しくはなさげな感じだったけど」
　それに、ちらりと見えたあの赤毛の少年は、確か青官長の息子だ。彼もまた傷を負っていた様子だった。
　彰司は痛ましげに眉を寄せている。
「それで、保護者には連絡が行ってるのか？」

「あー、そりゃ行ってるっしょ。俺ら部隊長に連絡来てるくらいなんだから」
端折っていた裾を元に戻す。血相を変えた『保護者』の様子が目に浮かぶようで、莉功は僅かに苦笑を浮かべた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2　壱班保護舎

＊＊

　壱班の保護舎には医薬品のにおいが立ち込めている。行灯の火と、部屋の片隅に囲われた蝶灯が、狭い部屋に灯りを与えていた。

　影虎は須桜が必死の形相で治療を施す様を、壁に背をもたせ掛けて眺めていた。

「どうだ」

「治るわ。治すわよ」

　須桜は襷をかけ、着物が汚れるのも厭わず、雪斗の腕を取って治療をしていた。

　その彼女の手にも、切り傷があった。御影の血の効力を使用しているからだ。

「あたしは御影須桜よ。治せないわけがない」

　頬に伝う汗を肩口で拭い、須桜は早口に言った。指先から垂れる己の血の染みた糸で、傷口を手早く縫い合わせていく。

　御影の女の血は、治癒の効果を持つ。だが決して万能ではなく、自己治癒力を高める程度のものだと須桜は言っていた。誇れるものでも驕れるものでもない、とも。

　だから彼女は日々医療技術を磨いている。救えるように、と。己の血を更に役立てられるように、と。

　その彼女が治ると、治すと言っているのだ。だから、雪斗の腕は治るに違いない。腱を傷つけられていたようだが、それでも治る。また動かせる。

「……だってよ」

　と、影虎は傍らに蹲る主に声を投げかけた。

今、ここの保護舎にいるのは影虎と須桜と紫呉。そして雪斗だ。壱班の者は外に出て行ってもらった。須桜が思うように治療ができなくなるからだ。

紫呉は影虎の声に、僅かに肩を揺らした。彼はさっきからずっとこうだ。両膝を抱え、顔を伏せ、まるで祈るように指を組み合わせている。

影虎は小さく嘆息した。壱班からの知らせを受け、慌てて駆けつけた。助けが必要なほどの怪我を負ったと聞いていたが、どうやらそれは己の主ではなくて雪斗のようだった。

少しばかりほっとしてしまった自分は、どうやら骨の髄まで『影』であるらしい。そんな己を嫌悪しないでもないが、そういう生き物なのだから仕方がないと思う己もいる。

大きな外傷は見当たらなかったが、紫呉も負傷していた。どうやら臓腑に衝撃を受けたようだ。血と反吐を吐いた様子だった。もしかすると、あばらの数本なり損傷しているのかもしれない。

が、それを紫呉が影虎に伝える事はないだろう。彼は心配される己を嫌って、いつも傷を隠そうとするから。紫呉の治療をした壱班の隊員に、後でこっそり詳細を聞いた方が良いかもしれない。

紫呉が組んでいた指をほどいた。ぐっと拳を固めた右の手を、左の手のひらで包み込む。拳を固める右の腕が、僅かに震えていた。

感じるのは怒気だ。押し殺しきれぬ怒気が溢れだし、血の臭気に淀む空気を焼いている。

影虎は側に膝をつき、紫呉の手に手を重ねた。半ばこじ開けるようにして、拳をゆっくりと開かせてやる。

「爪、刺さんぞ」

紫呉の手は、いやに冷たかった。案の定手のひらにはくっきりと爪の痕が残っており、影虎はふっと息を漏らすようにして笑ってしまった。

ようやく紫呉が顔を上げた。こちらを見る眼差しには、見覚えがあった。

怒りに塗り固められた、真黒い眼。夜の淵を覗いたかのような、底の見えぬ漆黒だ。
だが二年の昔のような、からっぽの眼差しではない。深い黒の中に怒りという明確な感情が窺えるだけ、ずいぶんとマシである。
例えるなら炎だ。黒い炎だ。
「影虎」
名を呼ぶ声はひどく掠れていた。酸に喉を焼かれた所為だろう。
何だ、と視線で促がすも、紫呉はそれきり口を噤んでしまった。影虎は続きの言葉を引き出す事を諦め、重ねていた手を離した。
（炎か）
よぎるのは、紅緋の眼と蜜色の髪。日生焔の血に連なる、齢十五の少年の姿。
影虎は確信していた。紫呉とやりあった相手は、加羅に違いない。血反吐を吐くほどの腹部への攻撃を、紫呉がそう簡単に許すはずがない。それほどの大きな隙を生み出せるのは、加羅以外にいない。紫呉が防御も間に合わぬほどの、疾さを有するのも。
きっと、雪斗を傷つけたのも加羅だろう。
（何を考えてんだ）
笑みを含んだ紅緋の目は、どこまでも底を見せようとしない。
可能ならば、この手であの存在を取り除いてしまいたい。だが、できるわけもない。加羅は日生加羅。玻璃の里を統べる日生の一族だ。
それを、如月の狗である己が勝手に噛み付いて良いはずもない。主がそうするよう命を下す事もないだろう。己に流れる如月の血に誰よりも歯噛みしているのは、紫呉自身なのだろうから。
もしも如月が日生に牙を向けようものなら、すぐさま二璃の里間に戦が起こるだろう。瑠璃と玻璃、軍事力を競えばきっと互角だ。だが問題はそこではない。民の血が流れる事を、紫呉は望んでいない。
だからこそ、今までもずっと黙ってきたのだ。

六年前、加羅が紫呉を刺した時も。
二年前、加羅が翔太を殺した時も。
ずっと、耐えてきたのだ。
（……何を考えてんだ）
加羅の考えが、望みが分からない。加羅の行動動機が読めない。分からぬ以上、対処のしようもない。
「とりあえずは終わったわ」
治癒の為に傷をつけた腕に手早く包帯を巻きながら、須桜が言った。流れる汗を疎ましげに肩口で拭い、大きく息を吐く。
「しばらくは様子見ね」
影虎は巾を渡してやった。受け取った須桜はぐいぐいと荒っぽく汗を拭い、厳しい目で雪斗を見やる。
ふいに、ばたばたと慌しい足音が聞こえた。二人だ。入り口で、壱班の者と問答する声が聞こえる。
「紗雪」
はっとした声で、須桜が呼んだ。入り口へと向かおうとした須桜だが、血と薬品で汚れた己の格好を見おろし、逡巡した様子だった。
代わりに、というわけでもないが、影虎が入り口へと向かう。
戸を開けるなり、不安に濡れた赤銅色の目が影虎を見上げてきた。
「影虎さん、あの、雪斗が」
「ああ」
落ち着け、というように、影虎は紗雪の肩を叩いてやる。紗雪の隣には母親であろう女性が立っており、同じく不安げな表情を浮かべていた。雪斗は坂崎の家を勘当された身だが、やはり息子は可愛いのだろう。
「今ちょうど治療終わったところだ」
「へ、平気なの？　腕って……。また、ちゃんと動くのよね？」
血の気の引いた顔と震えた声が、かわいそうなほどだった。
影虎の向こう側の雪斗を見ようと、紗雪が身を捩る。影虎は場所を入れ替えるようにして、中に通してやった。

駆け寄った母子は雪斗の手を取る。浮かぶ涙が痛ましかった。
「大丈夫よ、安心して。あたしが絶対に治すから。誰にも悲しい思いはさせないから」
信じて、と須桜が強く言う。母子は何度も頷き、涙を拭った。
その様子を、紫呉は黙って、ただじっと眺めていた。

3　大通りに通じる小路

やがて、母子の涙声も止んだ。
また様子を見に来るから、と意識の無い雪斗に呼びかけ、坂崎の母子は保護舎を後にした。後ろ髪を引かれている様子だったが、振り切るようにして家路につく。
見送った須桜の肩から、力が抜けるのが分かった。長く息を吐いた彼女は壁にもたれ、そのままずるりとしゃがみ込む。
「寝るなら仮眠室行けよ」
「ううん、ここにいる」
まだ目を離せないから、と須桜は雪斗の横たわる寝台に視線を流した。麻酔が効いているのか、雪斗は一見、穏やかな表情で眠っているように見える。
「須桜」
うとうとしていた須桜だったが、紫呉の呼びかけに、はっと顔を上げた。
「雪斗は頼みましたよ」
「……もちろん」
立ち上がった紫呉を上目に窺う須桜は、何かを言いたげにしていた。だが何も言わずに、戸口へと向かう紫呉の背を眺めていた。
タン、と戸を閉める音が静かに響く。二人は閉ざされた戸を、黙って眺めていた。
須桜は動こうとしない。それどころか、膝を抱えてそのまま眠る体勢だ。
そんな彼女をちらりと見やり、影虎は紫呉の後を追った。戸を閉ざす音がややうるさく響いたが、雪斗の麻酔はまだ切れていない。目を覚ます事はないだろう。
保護舎を出て、辺りを見回した影虎は、大通りへと通じる小路を

歩く紫呉の後ろ姿を見つけた。
「おい」
呼びかけるも、紫呉は歩みを止めない。駆け寄る。肩を掴んで引き止めた。
「どこ行くんだよ」
「屯所へ戻ります」
淀む事無く答える声は常の通りに平坦で、まるで感情など抱いていないかのようだった。
「なら俺も戻る」
振り向かぬまま、紫呉は舌を打った。肩を掴む影虎の手を、煩わしげに振り払う。
「放っておいて下さい」
「ほっとけるか」
払われた手で、影虎は再度紫呉の肩を掴む。今度は強く、力を込めて。
どこへ行こうとしているのかは分かっているのだ。ならば尚更、放っておけるわけがなかった。
掴んだ手は、再度振り払われた。触れた手がパンと鳴り、その音の高さに紫呉の拒絶の強さを知る。
「邪魔をするな」
振り返った紫呉が、影虎を睨み上げる。抑揚のない声音には、明確な怒りが滲んでいた。
払われた手がひりついた。紫呉を見おろす影虎は、己の中の苛立ちがさざめくのを妙に客観的に感じていた。
「……ふざけるなよ」
低く呻き、紫呉の胸倉を両手で掴みあげた。息の詰まった紫呉が苦しげな表情を浮かべる。影虎の腕を外そうと紫呉はもがいたが、影虎は軽くそれをいなした。
「ふざけるなよ。邪魔するに決まってんだろうが」
紫呉がどこへ行こうとしているのかは分かっている。

玻璃だ。
行かせてはいけない。もしも紫呉が如月紫呉だとばれでもしたら、戦の火種を生み出してしまう。火種となる事を一番厭っていたのは、紫呉自身だというのに。
そして何より、身柄がばれるということはつまり、紫呉の身に危険が差し迫るという事だ。紫呉が何者かを知る者に捕らえられ、拘束されるという事だ。
そんな危険の渦巻く場へと、送りだせるわけがなかった。
紫呉の爪が腕を引掻く。こちらを強く睨む紫呉を静かに見おろし、影虎は胸倉を絞る手に更に力を込めた。
「……はなせ」
「へえ？」
嘲弄を込め、鼻を鳴らす。
「それは正式なご命令か？　ご主人サマ」
睨む視線が、僅かに緩んだ。
「なら俺は尻尾振って従ってやるぜ？　なんたって、俺はお前の狗なんだからよ」
唇を歪め、影虎は嗤う。己を嗤っているのか、主を嗤っているのか、自分自身よく分からなかった。
思い出す。今までに紫呉が己に下した正式な命令。
それはただ、死ぬなの一言だ。
六年の昔、紫呉を護ろうとして影虎は足を失った。無くした足元に紫呉は蹲って泣いた。
護らなくて良い。だから死ぬな。命令だ。
紫呉が俯く。ぎりと歯を食いしばる音が聞こえた。
「……奪うと言ったんだ」
低く押し殺した紫呉の声は掠れて、震えていた。影虎の腕に立てた爪が、力無く皮膚を掻く。
「お前は、ただ、待っていろと言うのか？　奪われるのを、黙って見ていろと言うのか？」

絞り出すような声音が痛々しかった。
「……もう嫌だ。僕のせいで、誰かが苦しむのは」
もう嫌なんだ。
吐息に混ぜ込むようにして、紫呉はもろい声を落とした。
更ける夜が重々しく立ち込めている。夏の空気を満たす黒は深く、夜と己の境目を曖昧にする。
掻かれた腕が、ようやく痛みを感じ始めた。ちりちりとした痛みが、どうにも落ち着かない気分にさせてくれた。
ふ、と紫呉が息を抜く。顔を上げた紫呉は、影虎をきつく睨みつけた。
「はなせ影虎」
「はなすかよ」
「はなせ」
「……嫌なんだよ！」
情けないほど、己の声は揺れていた。瞠目する紫呉の肩を掴んで、割れた声を上げる。
「行かせるかよ！　俺がどんだけびびったのか知ってんのか！？ふざけんな、ちくしょう、馬鹿なこと言ってんじゃねえよ……」
思い出す。あれは澪月。慟哭する夜空。鼓膜を打つ雨音。
濡れた紫呉の体。夜闇の中でも分かるほどに真白く血の気の引いた顔。溢れる鮮血。赤い、紅い。
怖かった。死んでいるのかと思った。失うのかと思った。叫びだしたい程に、恐ろしかった。
「……嫌なんだよ。嫌だぜ、俺は。お前がお俺の見えない場所で傷ついて、俺の手の届かない場所で血ぃ流して、俺の支えられない場所で苦しむのは」
紫呉の肩口に額を押し当てて、懇願するように言葉を紡ぐ。
なあ紫呉。お前は俺の希望で、俺の絶望で、俺の全てだ。お前は俺の世界そのものだ。
だから、違った場所で果てるなど、許されて良いはずがないんだ。

妙に指先が冷たかった。震えているのだと影虎は気がついた。いっそ笑い出したいような気分だった。
みじめだという自覚はあった。
だが、それでも。
行かせたくはなかったのだ。

4　第三保護室前の廊下

まるでむずかる幼子のようだ。
肩口から伝わる体温に安堵を覚える。影虎は、そんな自分がどうしようもなく馬鹿らしく思えた。
「……はなせ」
断固とした響きだった。拒絶するような。振り払うような。
硬いその声が影虎の鼓膜を揺らし、すとんと胸の奥に落ちてくる。
無理なのだと知る。己では紫呉を引き止められない。己はこの男の枷とはなれない。己はこんなにも、この男に縛られているというのに。
（……それで良い）
影ごときに縛られるような主であってはいけないのだ。己の主は、こんなくだらない懇願ごときに揺らぐような、そんなつまらない男ではない。
影虎は体を離した。瞑目して、息を吐く。
「では、ご命令を。我が主」
ふざけた口調を模って、笑ってみせる。見上げる紫呉の目は、いかにも物言いたげだった。
視線で促がせば、紫呉は目を伏せ、僅かに笑みを浮かべたようだった。
「草薙影虎に命じる」
一呼吸置いて、紫呉は言った。
留守を頼む。
聞きなれた、表情の無い硬質な声音。その声が揺らいだ心根を粛してくれる。いっそ酩酊感すら覚えるようで、この児戯じみた命令ごっこさえ愉快に思えた。
「御意」

戯れついでに厳かぶって答えれば、滑稽な戯れに心から従ってやろうかという気になれた。
紫呉は軽く影虎の胸元を（ちょうど心臓のあるあたりだ）押して、数歩下がる。薄い唇が何か言葉を紡ごうと開かれるが、結局紫呉は唇を真一文字に引き結んだ。真黒い瞳に僅かな逡巡が窺える。それを断ち切るように身を翻し、紫呉は駆け出した。
振り返りもせずに夜道を行く背を見送れば、急にずしりと肩が重くなったように思う。影虎はその場にしゃがみ込み、遠ざかる足音に耳を澄ませた。
やがてそれも聞こえなくなった頃、影虎はようやくに立ち上がった。首を回して、肩に積もる重みを追いやる。ごきんと鳴った骨が、我ながら年寄りじみていておかしかった。
のろのろとした足取りで、保護舎へと戻る。砂を掻く左右非対称の己の足音がやけに煩わしくて、影虎は必要も無いのに足音を殺して歩いた。
雪斗が保護されている部屋の戸を、ゆっくりと開ける。
影虎が部屋を後にした時の格好のまま、須桜は壁際に座り込んでいた。抱えた両膝に埋もれさせていた顔を上げ、おかえりと小さく呟く。
「……お前がとめてくれるかと思ったんだけどな」
「まさか。無駄よ。あたしが何か言って、聞くような子じゃないでしょ」
須桜は立ち上がり、影虎の側までやってくる。須桜は雪斗の様子をしばし窺っていたが、ほどなくして一つ頷いた。目顔で部屋の外を示す。
二人は連れたち、部屋を後にした。戸のすぐ側に立ったまま、夜のしじまを乱さぬように小さな声で会話をする。
「薬なり何なり使えば良いだろ」
「一緒よ。仮に無理やり眠らせても、目を覚ましたら行っちゃうに決まってるわ」

「……何か腹立つ」
「何が」
「別に」
須桜が妙に紫呉を理解している様子なのが、腹立たしかった。引きとめようとしていない事も、何だかやたらと腹が立つ。
今になって、紫呉の前で平静を乱した事が恥ずかしく思われた。紫呉が帰ってきた時は素知らぬ顔で通そうと思っているが、何も言われないならそれはそれで恥ずかしい。いっそ罵り馬鹿にしてくれた方が、楽になれそうな気がした。
影虎は腕を組み、須桜から顔を背けた。保護舎の廊下は行灯が薄暗く照らすばかりで、顔の赤みまでは気付かれないだろうがそれでも、気分的に顔を見られたくなかったのだ。
「……何か言ってた？」
「留守を頼むってさ」
「そう」
須桜は壁に背を預けた。見おろすその横顔には疲労が色濃く見てとれた。無理も無い。雪斗の治療に、精魂使い果たしたのだろう。
「悔しいわね」
「ん？」
影虎も須桜に倣い、彼女の隣に立って壁に背を預ける。須桜は己の両手を見おろし、唇を曲げるようにして笑った。
「あたし、結構強くなったでしょ？」
「そうなあ」
「影虎に比べたら、そりゃまだまだだけど。でも、ようやくあの子の側で戦えるくらいには、強くなれたと思うのよ」
須桜は俯いて、くすくすと笑った。
「……なのに、結局あたしはまた、あの子の無事を祈るしかできないのね」
そのうちに須桜の頬は弛緩するようにして笑みを無くし、疲れきった様相を浮かべるばかりとなった。

悔しいのは影虎とて同じだった。草薙とは主を守護し、そして死ぬ存在だ。そのくせこうして主の側から離れ、須桜と同じく無事を祈る以外に出来はしない。

命令だ。仕方ない。言い聞かせ、声を呑む。

それでもやはり、悔しかった。悔しくて、不安だった。

瑠璃の中で別の行動を取るならばまだ良い。瑠璃は縄張りだ。もし何かがあったとしたら、容易ではないにせよ、駆けつけることも可能だ。だが玻璃ともなれば、おいそれと手出しは出来ない。

行灯の灯りに、蛾の羽ばたきが大きく揺れていた。あの蛾も憐れなものだ。そんなに火に近づけば、さぞ熱かろうに。それでも、灯りを求めずにはいられないのだろう。

揺れる蛾の影から、影虎は目を逸らした。

受けた命令は何としてでも貫くつもりだった。留守を頼むと、紫呉は己に、命を下した。ならば貫くしかあるまい。

しかし、加羅の目的が見えない。手を打つにしても、いったいどうすれば良いものか。

「ほんっと、あの若サマは何を考えてんだかな」

「そうね」

短く応える須桜の声が嫌悪に濡れていた。

「奪うと言っていたわ。それから、追ってこい、って」

「追わせて、それで？　何がしたい」

「知らないわよ」

苛立たしげに須桜は眉を顰めた。

ふいに、視界の隅で揺れていた影が消えた。

行灯の火に呑まれた蛾が、ジ、と音を立てて地に落ちた。蛾は尚も羽ばたこうと、焦げた羽をうごめかしてもがいていた。

ブブ、ブ、と、耳障りな羽ばたきが聞こえる。地を這うその姿が見苦しい。影虎は帯に仕込んでいた長針を取り出し、蛾に向けて放った。

床に縫いとめられた蛾が動きを止める。静寂が再び廊下に満ちた。

行灯は今や何にも邪魔されず、静謐な灯りを生み出していた。
その灯りに目を細め、影虎は反芻した。
（奪う）
いったい、何を。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

5　玻璃へと続く間道・東

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

乾弐班の屯所まで、必要な物を取りに戻った。煙草は置いてきた。懐が妙にすうとするような気がしたが、気にしない事にした。

必要最低限の物資だけを手に、紫呉は玻璃へと続く間道を目指していた。

間道とは、玻璃と瑠璃の里境である玉骨と呼ばれる塀に沿って南に進んだ先にある道だ。本来玻璃に向かうならばこの玉骨を越え、正式な手続きを済ませねばならない。

だが、今回は誰にも知られるわけにはいかなかった。一昼夜をかけ、紫呉は間道を目指していた。

この間道の存在を知るのは、紫呉の他には二影とそしてきっと、加羅と二吼とだけだ。先日影虎が玻璃に忍んだ際も、おそらくはこの道を使ったのだろう。

塀に沿って歩みを進め続ければ、やがて玉尾が見えてくる。整備されていた玉骨は玉尾に近づくにつれ苔がむし、朽ちた色に彩りを変え始める。

玉尾は二璃の里を囲む樹海に飲まれるようにして、ぷつりと途切れていた。というよりもむしろ、樹海から玉骨が生えているような風情であった。曲がった枝を伸ばす樹に絡められ、どこからが樹で玉骨なのかも分からないほどだ。

歩き続けた体は疲労を訴えているが、歩みを止めるつもりはなかった。夜空を見上げれば燦々と光を降らす月が在る。それだけで、強くなれるような気すらした。

呼吸を落ち着け、紫呉は樹海へ足を踏み入れる。

深い深い森だ。月光すら足元に届かぬほどに木々は生い茂り、濃

密な草いきれが目に染みそうなほどだった。
木々を掻き分け、道なき道を進む。目印となるのは、西の方角に見える一際背の高い木だ。その木の側には、木を取り囲むようにして小高い丘が広がっている。僅かな面積だ。だがそこばかりは、日の届かぬ樹海の中、陽光の祝福を受けたように花々が咲き、風が草木を奏でていた。
記憶にあるその景色は、目を瞑れば今も鮮やかに瞼裏に蘇る。春の椿、夏の葵、秋の桔梗、冬の水仙。
懐かしい。しかしいらぬ感傷を呼び起こしてくれるその記憶は、今は邪魔なばかりだった。
垂れる汗を拭う。爽月とは本当に名ばかりだ。爽やかさの欠片も感じない。小風の一つも吹かぬ樹海には、淀んだ空気がひしめいている。
荒ぐ呼吸と共に、怪我の痛みがぶり返す。噴きだす汗が冷や汗なのか、通常の汗なのかも分からない。
紫呉は蹲った。腰の傷もまだ完治していない。血反吐を吐いた喉は呼吸のたびにじわりと痛む。
蹴られた腹も、どこが痛むのか分からない程度には痛んでいる。あばらが数本傷ついている、と壱班の隊員は言っていたか。
道理で、空咳をすれば腹が痛むはずだ。それにつられて腰まで痛みだすのだから、始末に終えない。
怪我が治るまで待つのが、せめてもの懸命な判断なのだろう。だが、待っている間にまた誰かが傷ついたら？　そんなのは御免だ。
取り出した痛み止めを噛み砕き、紫呉は立ち上がった。眩暈がしたが、苔むす幹に手をついて耐えた。
下生えを踏んで歩きだす。無心にひたすら歩みを進めていけば、西に見える高い木は、もう随分と近づいてきた。
枝葉を掻き分ければ、丘が開けた。月光に照らされた丘が、ぽかりと浮き上がって見えた。まるで湖の浮島のようだ。
その中央で、背の高い木がざわざわと鳴いていた。ひらりと舞っ

た広葉が紫呉の足元に落ち、小さくかさりと音を立てる。
夏の微風にさやと草が鳴る。闇に慣れた目に月光が眩しかった。頬を撫でて樹海へと流れる風が、柔らかで心地良かった。
丘は、記憶にある光景と違って見えた。それもそのはずだ。幼い頃、ここに訪れるのはいつも昼間だった。
あれは月見草だろうか。白々と夜に泳ぐ花は、夏の夜の濃密な空気に歓喜して震えているようだ。
髪を揺らす風が感傷を連れ来る。紫呉は丘に足を踏み入れるのを躊躇った。感傷に潰されてしまいそうで、怖かった。
大きく、息を吐きだす。丘の中心に立つ木を目指し、ゆっくりと歩き出した。鼓動が速いのは、きっと、歩き続けた所為だ。
高い木だ。幹も太く、しっかりと大地に根を下ろしている。ざらりとした幹の感触は、今も昔と変わらぬままだった。
真下に立って見上げた。葉を広げる枝が、夜空を支えているかのようだ。葉の隙間から漏れる月光が、頬に落ちてくる。
幼い頃、よくこの丘で遊んだ。お互い家族には内緒で里を抜け出し、日が落ちるまで夢中になって。お互いに護衛を連れて。
泥だらけになって転げまわる二人を、保護者ぶった影虎が呆れた顔で眺めていた。そんな影虎を呆れて眺めていたのは辰覇だ。
そういえば昔、辰覇に助けてもらった事がある。この木から落ちた紫呉を受け止めてくれたのだ。
須桜はめったに来なかった。おとこだけのひみつきちなのですよ、と得意になった紫呉が言った所為だ。
竜造はそれに輪をかけて姿を見せなかった。幼い愛娘と、先代の焔である与四郎の側を離れられなかったのだろう。
ここに立つのは、もう六年ぶりになるのか。瑠璃も玻璃も見渡せるこの丘では、いつも空が歌っていた。眩い蒼穹が世界を包んでいた。
今は二璃に等しく夜が降っている。皓々と冴える月が、二璃を抱きしめている。隅々まで夜に塗られた空で、星が瞬いていた。

手を振り別れるのは、いつも夕暮れ時だった。太陽と月とが顔を見せる朱色の空の明りを背負って、また今度、と、笑って。
あの頃は、ただひたすらに日々が楽しかった。無邪気だった。笑って、泣いて、笑いあって。
『ドンカを知っているかい、紫呉くん』
幼い声が耳に蘇る。
『ドンカはね、ドングリの精なんだよ。白くてふわふわしてるんだ。掴まえたら、幸せを運んでくれるんだって』
得意げに、紅緋の両眼を光らせて加羅は言った。
『でも、掴まえた人はまだ誰もいないんだってさ』
だから、と加羅は紫呉の手を取って笑った。
『おれたちが初めてになろうよ。掴まえて、里のみんなに幸せをあげるんだ』
草を分けた。藪を分けた。土を掘った。木に登った。
どこを探してもそれらしき姿は見えなかった。でもその代わりに、鳥の巣を見つけた。巣の中にまだ卵は無かった。
もしかしたら今からここで新しい命が生まれるのかもしれない。孵化する頃に、また見にこようと紫呉は誘った。
それに対しての応えは『そうだね、いつか』。
その『いつか』は、結局迎えられず仕舞いとなった。
紫呉は腹の傷を押さえた。
加羅と袂を分かったのも、この丘だ。
別れの間際に残された言葉は、さよなら。加羅は茜に焼ける空を背負って、痛みに呻く紫呉を見下ろして、笑って、さよなら、と。
別れを告げたその口で、加羅は追ってこいと言う。勝手な男だ。何がしたい。何を考えている。何を望んでいる。
必ず、暴いてやる。
これ以上、お前に奪わせはしない。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

6　壱班保護舎・第三保護室内

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

二

目を覚ました雪斗が最初に見たものは、深い瑠璃紺に染まった空だ。
明り取りの四角い格子窓から覗くその色が、今まさに夜が明けようとしているのだと、雪斗のぼんやりとした頭に知らせてくれる。
(格子窓?)
そんなものは、雪斗の住まう長屋には無い。
ここはどこだ。
妙に天井が近い。それもそのはずだ。雪斗は寝台に寝かされていた。
(寝台)
それも、雪斗の長屋には無いものだ。よく見れば天井も、見覚えの無いものだった。
慌てて身を起こそうとしたが、頭が痛んで無理だった。痛みに漏らした声が引き金となり、体中の痛みを思い出す。
中でも腕が、ひどく痛んだ。
腕。
両の腕が、じくじくと痛む。
持ち上げようとしたが、叶わなかった。痛い。痛い。どうして。痛い。怖い。何故動かせない。
そうだ、何者かに襲われた。背後から。頭を殴られた。そして腕を斬られた。
斬られたのだ。この腕は。だから動かせない。

ひゅ、と喉が鳴った。
（まさか、ずっとこのまま）
嘘だろう。そんな。
この先も動かない。動かせない。
二度と、傀儡舞なんてできない。
嘘だ。
オレから傀儡を取ったら、何も残らないのに。そんな。
呑んだ息に、雪斗は咳き込んだ。涙が滲む。嫌だ。怖い。痛い。苦しい。
苦しい。
ようやくその咳も止まった頃、雪斗はこの部屋にもう一人いることに気がついた。その人物は荒い呼吸を繰り返す雪斗の手を握り、大丈夫よと優しい声で何度も繰り返していた。
「……須桜」
「大丈夫。落ち着いて。あたしが治すから。絶対に治す。誰にも、悲しい想いなんてさせない」
大丈夫よ、と須桜は握った雪斗の手を、更に強く握り締める。
その手から体温が伝わってくる。雪斗はすがりつくように、震える手で須桜の手を握り返した。
「動いた……」
「今ちゃんと動かせないのは、体が痛いのを怖がってるからよ。大丈夫、絶対に治るから」
雪斗はゆっくりと首を巡らせた。
須桜の着物はやけに汚れていた。血と、よくわからないが、何らかの薬品によるものだろう、くすんだ色。
頬にもその色がついている。柔らかそうな白い頬に跳んだその色は擦ったのか、耳の下の辺りまで伸びていた。
くっきりとした二重瞼は重たげだ。長く濃い睫毛に縁取られた大きな目の下には、よく見ずとも隈ができていた。
雪斗の視線を受けて、須桜は唇に笑みを刻む。形良い唇だ。薄桃

色のその唇が、大丈夫よ、と愛らしい声を落とす。
改めて、整った顔立ちをした少女だと雪斗は思った。まるで傀儡の頭（かしら）のような、一分の乱れも無い愛らしさだ。
ああ、そうだ。初めて会った時も同じ事を考えた。まるで傀儡の頭のような顔をしている、と、そう思った。
その完璧な愛らしさは、雪斗の思う理想の傀儡の顔（かんばせ）だったのだ。どこかに操り糸がついているのではと勘ぐったほどだ。
だが彼女は傀儡ではない。自らの意志で動くし笑う。話す。体温もある。
（体温）
はた、と雪斗は手を繋いでいるのだと思い至った。やけに恥ずかしくなって手を払おうとするのだが、傷が痛んで出来なかった。
ゆるゆると指をほどく。顔を背けた。
「……その、さ」
「何？」
「須桜が、助けてくれたのか？」
傷を負った時の事は、あまり覚えていない。その時の痛みだけが鮮烈に焼きついている。
「あたしじゃないわ。あたしは手当てをしただけ。助けたのは紫呉よ」
「そう、なのか？」
須桜が首肯する気配がした。
そうだったのか。言われてみれば、そうだったかもしれない。ほぼ無いに等しい意識の中で、彼が呆然と雪斗を呼んだのを聞いたような気がする。
助けてくれたのが紫呉ならば、彼にも礼を言いたい。少しばかり、いや、だいぶと恥ずかしいような気もするが。
でも、ありがとうと一声かけたかった。おかげで、まだ傀儡を操れる体で在れるのだから。
「……なあ、その、……紫呉は？　どこにいるんだ？」

「仕事。多分、しばらくは戻らないわ」
「そっか……」
まあ、どうせまたそのうち紫呉は性懲りも無く雪斗の長屋にやってくるだろう。礼なら、その時に言えば良い。照れずに上手く言える自信は無いのだが。
雪斗は恐る恐る指先を動かした。走る痛みに息を呑む。
だが、同時に安堵した。痛みを感じるという事は、まだ神経が繋がっているという事だ。
この腕はまだ動く。動かせる。また傀儡を操れる。絶対に治ると須桜は言った。須桜がそういうのならばきっと、いや、絶対に治る。
何故自分がこんな目に遭っているのかは分からない。物盗りの類にでも襲われたのだろうか。貧相な想像力では、それくらいの理由しか思い当たらない。
盗るものなんて何もない家だ。それで逆上して、雪斗を襲ったのかもしれない。
正直に言えば、腹は立つ。治るまで傀儡舞はできないのだから。叶うのならば犯人をぶん殴りたいくらいだ。
でも、須桜が以前言ってくれたから。闘技場で、腕を傷つけられて我を忘れた雪斗をとめて、大事な手でしょ、と。
だから、この痛みも怒りも不安も、舞の糧とできるのならば。また、動くのならば。動かせるのならば。
それで構わない。
「……また、動くん、だよな？」
「必ず」
あたしが治すわと、言い切る須桜の声が頼もしかった。
「……分かった。……その、頼むぜ？」
可能な限りふざけた物言いを繕いたかったのだが、情けない事に声が震えてしまった。
「任せて」
誰にも、悲しい想いなんてさせない。信じて。

強いその声に、雪斗はただ黙って頷いた。
手当てをしただけと須桜は言うが、その手当てをしてくれなければ自分の腕はどうなっていたのか分からない。この傷がどれほどのものか門外漢の雪斗には分からないが、とにかく大量に出血はしていた。
ゆっくりと指を動かす。痛みはあるが、確かに動く。動かせる。
大丈夫。
大丈夫だ。
息を大きく吐く。怒りや不安を全て外に押し出すようにして。
数回繰り返せば、ずいぶんと気持ちも落ち着いてきた。
「……ありがとな」
今度は、須桜を見上げて言った。須桜はぱち、と瞬いた後、目を伏せてどこか気まずげに笑ってみせた。
「お礼を言われるようなことじゃないわ。だって、雪斗を治療したのは、あたしの為でもあるんだから」
疑問符を浮かべる雪斗だ。須桜は自嘲するように鼻を鳴らした。
「そりゃ、もちろんあたしだって雪斗の事は好きよ。助けられて良かったわ。でも、それ以上にあたしは、あの子が泣くのは嫌だったの」
好きの二文字に鼓動が跳ねたが、それよりも、須桜が自嘲するように言うその意味が気になった。
「……泣かせたくないのよ。良かったわ、本当に。あなたを助けられて」
しばし落ちた沈黙の後に、須桜はごめんねと小さく呟いた。
「あたし、嫌な奴ね」
唇を曲げて、須桜は嗤う。
須桜の言う『あの子』とは、紫呉の事なのだろう。どうして紫呉の名が出てくるのか不思議に思ったが、それ以上に雪斗は、己を嘲るように笑う須桜の笑顔を悲しく思った。
「……知ってるよ。あ、違う！　その、お前が嫌な奴って言いたい

んじゃなくて！」
取り繕って、雪斗は早口に言った。
「その、……須桜が、一番大切に思ってるのは紫呉だって、知ってる」
それで良いんだよ、と雪斗は不器用に笑みを刻んだ。そんなお前に惹かれてんだよとは、流石に口に出せなかったが。
ふ、と須桜は息を漏らした。やがて肩を揺らし、くすくすと笑い出す。
優しい笑顔だった。まるで、慈母を思わせるような。愛しげな。
だが彼女が抱くものは恋情では無い事も、雪斗は知っている。
彼女が抱くもの。
それは愛だ。饐える程に濃厚な、愛に近似した歪みだ。雪斗が傀儡に寄せるものと類を同じくするものだ。
そうか。きっと、だから惹かれた。同じ香を放つ彼女に。もしも彼女がこの香を纏わなくなったのならば、おそらく己は彼女に惹かれはしないだろう。
あの、熟れた眼差しを己に向ける彼女を欲してはいない。あの眼差しは、ただ一人だけに向けられていれば良い。そんな彼女に、己は惹かれてやまないのだから。
これは叶えるつもりのない慕情だ。
だから、それで良い。
雪斗はまたも顔を背けた。どうにも直視していられなかった。
「なあ、その……。そういや、ここどこなんだ？」
何となく気まずく思う心をごまかすように、雪斗は話題を変えた。
「壱班の保護舎よ。傷が治ってきたら家に帰れるわ」
「そっか」
ふいに差し込んだ朝日に、雪斗は目を細めた。
ねえ、と須桜が声を低めた。
「……あのね」
「ん？」

「多分、ね。雪斗は、雪斗が思ってる以上に、あの子にとって、大切なの」
「な、何だよいきなり」
気持ち悪い、と正直思った。が、須桜の声は真剣で、茶化せるような雰囲気ではなかった。
「だから今、雪斗が怪我して、すごく苦しいって、思ってると、思うの」
ぽつぽつと、細切れに須桜は言った。
「……ようやく、手を伸ばそうとしたのよ。友達だった相手に、傷つけられて。傷ついて。刀を手にして。色んなものを、遠ざけるみたいになって。……それでもようやく、手を伸ばそうと、してくれたのよ」
須桜の語尾が震えたのは、怒りの為か涙の為か。
「だから、……。あたしが言うのは、おこがましいって分かってるけど」
こくん、と唾を飲む音がした。
「あの子の手を、払わないであげてね」
懇願の響きを持ったその声に、首を振れるはずもなかった。
それにそもそも、振るつもりもなかった。不本意ながら、情など、既に湧いてしまっているのだ。
目を瞑る。そういえばあいつはまた怪我をしていた。痩せて、やつれて。
無茶をするなと告げたのに。はいと答えたくせに。なのにまた仕事か。どうせ今度も、危ない事をしているのだろう。
バカな奴だ。
「……ごめん、疲れさせちゃったわね。まだつらいでしょ？」
否定しようと思ったのだが、目を瞑った途端に眠気が押し寄せてきて、雪斗は力なく首を振るだけしか出来なかった。
おやすみ、と須桜が掛け布を肩まで上げてくれる。
軽い足音が部屋の外へと向かうのを、雪斗は眠りに落ちる寸前に

聞いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

7　玻璃へと続く間道・西　そして

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　夜は明けるその直前に、一層濃く色を深める。樹上の紫呉は、深い瑠璃紺の空を眺めていた。
　稜線と交わる空が暁に染まり始めた。赤に塗りつぶされるようにして、瑠璃紺はやがて橙に色を変える。
　姿を現した太陽は、山々を一層黒く彩る。空の赤と橙が白みを増すその一方で、浮かぶ雲が紅く彫られていく。
　そのうちに、太陽が全貌を見せた。紫呉は眩さに目を細めた。風がざわと森を鳴らして吹き抜けていく。
　空の隅、真紅の残輝が、蒼穹に飲まれゆこうとしている。白々と輝く雲の切れ間から、燦燦と光が降り注いでいた。
　ほどなくして雲も紅さを消し、慣れた薄墨の陰影と戯れ始めた。萌える深山に影を落としながら、空をゆるゆると流れていく。
　響く小禽の鳴き声が嫌味なほどに爽やかで、紫呉は何となく笑い出したい気分になる。頬をくすぐる風が心地良かった。
　朝の空気は、どことなく白に包まれているようだ。その中、群山とその足元に広がる森林が緑を主張し、風に歌っていた。
　紫呉は爽月の朝の空気を思い切り吸い込み、吐き出した。あばらが痛むようだったが、気にしないことにした。
　樹上に在ったのは、野犬を避ける為である。安定せぬ姿勢での眠りではあったが、野犬に注意を払いながら眠るよりは随分と気が楽だった。
　紫呉はするすると樹上から降りた。この木に登るのは数年ぶりだったが、たくましい枝ぶりは今も変わらぬままだった。幼い頃に見かけた、鳥の巣はもう無かった。

透かし柄の蝶が踊る柿渋色の羅の羽織に、腕を通す。その羽織は影虎のものだった。着丈が合わず袖が余ってしまうが、足りぬよりはずっと良い。次いで、白紗の襟巻きを巻く。

簡易的な変装だ。この姿を見た者の記憶に留めさせ、もしもの時には羽織と襟巻きを捨てて逃げれば良い。ついでに袴も脱ぎ捨ててしまえばもっと良いだろう。

紫呉は玻璃へ続く森に足を踏み入れた。今まで以上に神経を尖らせて、足音を殺して歩く。

ふいに、肩に食い込んだ影虎の手の力の強さを思い出す。まるで縋るような弱い響きを持った彼の声が、胸の奥に引っかかる。

どれだけ迷惑をかけているのか。どれだけ心を痛めさせているのか。分かってはいる。

だが、何もせずにいるなどと。

『――おれは奪うよ』

煩わしいその声を、紫呉は首を振って彼方へ追いやる。

紫呉自身に加羅の刃が向かうならば良い。紫呉が耐えれば良いだけの事だ。

しかし、他者へとその刃を向けるのならば。

（……阻むに決まっているだろう）

血に染まった雪斗の腕が脳裏によぎる。

あの腕は、傀儡を舞わせる腕だ。器用に花を作ってみせる腕だ。作り、生み出すための腕だ。

美しいものを生み出す事に、命を注いで生きている男だ。その雪斗から、何よりも大切であろう腕を奪うなど。

この腕は、奪い戦う事しか知らないけれど。それでも、彼が大切に思うものを、護れるのならば。

戦ってやるさ。

もう、奪わせはしない。

体の痛みに汗が滲む。だが歯を食いしばって耐えた。いつ帰還できるか分からないのだ。限りの有る薬に簡単に頼ってはいけない。

それに、これしきの痛みなど。雪斗の負った痛みに比べれば。
痛みと怒りと空腹は判断を鈍らせる。分かっている。だが、まだ大丈夫だ。まだ己は冷静だ。落ち着いている。
そう言い聞かせる必要がある程度に心はさざめいているのだと、紫呉は気付いていないふりをしていた。
汗を拭う。むせ返りそうな程の濃い草いきれを思い切り吸い込み、息を吐いた。
手首の牙月に指を沿わせる。牙月は応えるように、パチと鳴った。
頼れるものはこの牙と、己の肉体。援けるものは、己の精神。
さあ、戦え。
まだ早朝だというのに、太陽は容赦なく照りつけてくる。足元に落ちる木洩れ日を踏みしめ、紫呉は歩いた。
加羅は確か、玻璃の中央部に住まうはずだ。そう聞いたのは幼い頃ではあるが、日生の若君がそうそう簡単に居屋を変えはしないだろう。
玻璃の中央部――、そこには瑠璃の支暁殿（しぎょうでん）と対を成す、鼎宵殿（ていしょうでん）があるはずだ。
水晶の甍は陽光を七色の彩りに変じさせ、蒼穹と共に美しく照り輝くと聞く。
それを取り囲むのは高い塀と、七官吏の官舎。贅を凝らした造りは、迂闊に手を伸ばせばその威光に焼かれてしまいそうな程の、権威の象徴だという。
噂には聞いていた。だが所詮噂だろうとも思っていた。しかし、初めて目にして紫呉は納得した。
なだらかな丘陵から滑るようにして道に降りる。森を抜けると、遠くに鼎宵殿が見えた。
中央には、まだ随分と距離があるはずだ。だが、この距離からでも感じるその眩しさに、紫呉は思わず目を細めた。
蒼穹を目指し屹立するその姿は、凛々しさと優美さ、雄々しさと華やかさ、おそらくは美しさを形作る全ての要素を内包しているよ

うに思える。
煌く甍はひたすら眩く、目を焼かれてしまいそうである。だがその七色の光彩は、たとえ眩さに目を焼かれようとも見ていたいと思わせる美しさが有った。
汗を拭う。まるで睨むような鋭い視線で、紫呉は鼎宵殿を見上げていた。
だがやがて視線を逸らし、俯いた。襟巻きを引き上げ、顎を埋めるようにする。のろのろと歩き出した。
ここは玻璃だ。鼎宵殿を視界に入れた途端、そう強く感じだ。
鼎宵殿には、容易に近づけないだろう。警備はもちろん厚いに違いない。
（……ひとりで、何ができる）
弱気が駆け抜ける。
紫呉は爪先で砂を軽く蹴り、舌を打った。
不要だ。
感傷も、弱い心も。
惑うな。迷うな。
何の為に、己はここに来た。
（考えろ）
弱さに揺らぐよりも、打つ手を考えろ。
どうすればあそこに近づける？
どうすれば加羅に追いつける？
必要な情報は何だ。
（警備の体制）
だがどうやって知る。まさか人に尋ねるわけにもいくまい。
とりあえずは、中央部に近づいてみるか。
（いや）
先に、脱出経路の確保だ。どの道がどこに繋がっているのか、それを知る必要がある。
とりあえず早朝の今、森に面したこの小道に人の姿は無い。民家

も近くには無く、周囲は豪商の蔵と見受けられる建物が連なっている。
蔵を囲む塀に手をつけ、見上げた。塀は、勢いをつければ跳び越えられる高さだ。
全神経を聴覚に集中させる。塀の向こうに人の気配は感じられない。
それが朝の今だけのことなのか、それとも常の事なのか。分かりはしないが、とりあえずは塀の内に籠れば追っ手をやりすごす事もできそうだ。
仮に人がいたとしても、それは玻璃の赤官や護焔隊などのような、戦闘訓練を受けた者ではない可能性が高い。警備を請け負った民間の者だろう。
ならば、口止めも容易い。
蔵は道なりにずっと続いている。塀に沿って歩きつつ、中の気配を探る。やはり中に人はいなさそうだ。
ふ、と詰めていた息を吐いた。どっと疲れが圧し掛かってくる。そのまましゃがみ込んでしまいたい衝動に駆られた。
目の前がちかちかと光る。視界が狭まる。
(駄目だ)
肩口を塀に寄せ、ずるりと屈んだ。
気持ちが悪い。痛い。
休んでいる場合ではないのに。
だって、早くしないと。奪うよと加羅は言ったのだ。
また、誰かが。
(誰が？)
いつ。
何も分からない。
「くそ……っ」
固めた拳を、塀に叩きつけた。
なあ日生、お前の望み通りにお前を追ってきてやったぞ。

何がしたい。何を望んでいる。教えろよ。早く来いよ。
腹が痛む。左の脇腹だ。昔、加羅に刺された場所だ。
違う、今痛むのは、あばらに傷を負っているからだ。蹴られたから。その所為だ。
どちらにせよ、加羅がくれた傷痕だ。
「……は」
思わず声が漏れる。
笑ったのか、息を吐いただけなのか、紫呉自身にも判別がつかなかった。
己の身を抱くようにして、服の上から傷を押さえる。
（翔兄）
懐かしい名にすがりつく。
下ろした瞼裏によぎるのは、首の無い翔太の姿だ。
そうだ、あの時も、二年前も、加羅に斬られたんだ。ずらりと腹を撫で斬られた。
何故ここにいると聞こうとしたのか、何故あの時あの丘で僕を殺そうとしたんだと、そう聞こうとしたのか。それは分からないけれども。
とにかく何故、と、そう言おうとしたのだと思う。
けれど言葉にはならなかった。言葉になる前に、加羅の刃に紫呉は裂かれていた。
倒れた紫呉の傍らで、加羅は血振りをした。そして向陽を振りかぶる。
だが首を落とされたのは、紫呉ではなく翔太だった。
（……僕の所為で）
翔太は死んだ。
（また、誰かが）
僕の所為で。
（……させるものか）
今度は。

今度こそは。
もう、己の所為で誰かが傷つくのは嫌だ。
だから。
（立て）
まだ、抗えるはずだろう。
紫呉は叩きつけた拳を開き、塀に爪を立てた。うまく力の入らない脚を叱咤し、不恰好に立ち上がる。
足元に落ちた汗が、ぽつと音を立て、じわじわと地面の色を変えていく。
照りつける陽光が肌を焼く。眩む視界の隅で鼎宵殿は尚も艶やかに煌いている。
荒い呼吸のまま、紫呉は鼎宵殿を睨み上げた。
塀を頼りに、ずるずると体を引きずるようにして、歩き出す。
白めく早朝の空気は、高く昇り始めた太陽に散らされつつあった。

8　まことのまほらなり

やがて市街に辿りついた。その頃には随分と痛みもマシになり、呼吸も楽になっていた。

どうやら朝市が開かれているようだ。数はそう多くないが、開かれた通りには、ぽつぽつと屋台が点在していた。

紫呉は汗を拭うがてら、襟巻きを引き上げた。この暑い爽月の最中に、襟巻きを巻いた紫呉の姿は異様に見えるのだろう。視線を感じた。

それで良い。己の風貌を記憶に留めさせるのではなく、己の服装の特徴を記憶に植えつけたいのだ。

こちらを撫でる視線に敵意は感じられないが、不可思議そうな表情を浮かべるその顔は、関わりたくないと言っているようだった。

果実売りの屋台の前に立つ女性は、紫呉と目が合いそうになると、さっと目を逸らして俯いた。そして左の手をぎゅっと、大事な物を護るようにして握りこむ。

その仕草の意味が気にかかった。

（……水晶？）

女性の覆う右の手の下、左の手の指にちらりと光る物が見えた。どうやら玻璃玉の指輪であるようだ。

次いで女性は、里の中央を振り仰いだ。そちらの方角に何があるのかは、紫呉も知っている。鼎宵殿だ。

だがどうして。

女性は鼎宵殿を振り仰ぎ、一礼した。そしてそそくさと立ち去っていく。

その女性につられたのかどうかは知らないが、周囲にいた者達も次々と、鼎宵殿を振り仰ぐ。煌く御殿を視界に留めるなり、彼らもまた一礼した。

意味は分からないが、紫呉もそれに倣って一礼する。

よく見れば、彼らはどこかに玻璃玉を身につけていた。指輪や腕飾り、首からぶら下げている者もいる。
顔を上げた。紫呉の事を胡乱な目つきで見ていた者達だが、紫呉の左の手首にもまた水晶の数珠が光るのを目に留め、ほっとしたような顔をしてみせる。その表情はどこか親しげですらあった。
道行く人々の中の一人がこちらにやってきた。まだ若い男だ。三十路ほどだろうか。彼は親しげに微笑みを投げかけながら、紫呉に向けてひらりと手を振った。
「なあ、おい」
彼の胸元にも、水晶の玉が光っていた。綺麗な球形に磨かれたそれは綾紐に通され、たくましい胸元で揺れている。
「顔色が悪いな。どこか具合でも悪いのか？」
彼はよく日に焼けた顔に、笑みを浮かべた。にっと剥いた歯が不自然な程に白かった。
紫呉は警戒して一歩下がる。敵意は感じられないが、警戒するに越した事はない。
周囲はこちらを気に留めてはいない。紫呉がここに現れる前と同じであっただろう、なごやかな空気で買い物を楽しんでいる。
「ん、どうした？」
周囲がもう紫呉の気にかけていないのも、この男が親しげなのも、きっと牙月のおかげなのだろう。
牙月は打刀の黒器であるが、変態を命じていない今は水晶の数珠の姿をしている。おそらくはその事が玻璃の民たちに、紫呉が共同体の一員であると思わせている。
牙月が水晶の姿であるのは全くの偶然であるが、これは好機なのかもしれない。
「その襟巻き、もしかして風邪でもひいたか？　喉を傷めたのか？」
親しげに笑む男に、紫呉は曖昧に頷いた。
「そうか、それは大変だったな」
男は腕を組み、かわいそうになあと言いながら数回うんうんと頷

いた。
こちらを見る周囲の眼差しが、やけに和らいでいる。
――まあ、優しいこと。
――中々の男ぶりじゃあないか。どこの組の衆だろうね。
（組？）
聞こえる声音に、紫呉は耳を澄ませる。
――なぁに、優しいのは彼だけじゃあないさ。
――ああ、そうだねえ。
――この里はとても良い里。誰一人悪人などはおりません。
――この里はとても良い里。何一つ不満などございません。
満ち足りた声でささめき、彼らは鼎宵殿を仰ぎ見る。一礼して、身につけた水晶を愛しげに撫でさする。
その声にも顔にも、嘘はないように見えた。
「なあお前、どこの組の者だ？」
男は首を傾げた。
組とは、先程ちらりと耳にした『組』のことだろうか。
だがその『組』が何を意味するのか分からないのだ、迂闊な事は言えない。
紫呉は男の様子を上目に窺いながら、口をつぐんでいた。
「どうした、何故答えない」
男の声は笑んだままであったが、僅かに低まったようだった。笑みを浮かべたまま、男はこちらにじりじりと近づいてくる。
薄ら寒さを感じ、紫呉はまた一歩、距離を取る。
「どこの組の者だ？」
さやさやと、周囲にざわめきが生まれ始めている。

「どうして答えない」
男は尚も笑んだままだ。
「もしや」
ふ、と男の笑みが掻き消えた。
「不具か」
ざわめきが膨れ上がった。

9　外れの地

耳を打つざわめきは嫌悪感で満ちていた。そそくさと立ち去る者もいれば、遠巻きにこちらを窺う者もいる。

男は紫呉に向かって、にゅうと手を伸ばしてくる。

紫呉は身を引いた。それが気に食わなかったようで、男は眉をきりきりと吊り上げる。

（どうする）

逃げるべきか。それとも、男の好きにさせるべきか。

男の作る影が、覆いかぶさるように頭上に降ってくる。襟巻きを引き上げて顔を隠し、紫呉は上目に男の様子を窺った。

笑みの隙間から零れる、やけに白々と光る男の歯が気味悪かった。伸ばされる手に、唾を飲み込む。

途端、後頭部に衝撃を感じた。力強くがしりと掴まれ、そのまま前のめりに頭部を倒される。

「申し訳ございません」

後ろから、女の声がした。

女によって強制的に礼を取らされた格好のまま、紫呉は疑問符を飲み込み、横目に女を窺った。紫呉の頭部を押さえつけたまま、女もまた、深々とお辞儀をしていた。

男が舌を打つ音がした。女はゆるゆると上体を起こす。それに伴い後頭部を押さえつける力が緩み、紫呉もゆっくりと体を起こした。

女は二十七か、八といったところだろうか。線の細い華奢な姿をしているが、纏う空気はいかにも鉄火肌である。

長く伸ばされた茶色の髪で、女の顔は隠されていた。きゅっと引き結ばれた唇は赤く、婀娜を感じさせる。

女は汗ばむ首筋に貼りつく髪を疎ましげに指先で払い、前髪越しに紫呉を見やった。その視線は鋭いが、敵意は感じられない。

男は、じろじろと無遠慮な視線を女に注いでいる。女は男の視線にたじろぐことなく、地面に視線を落とし、ピンと背筋を伸ばしていた。

「お前も不具か」

男は鼻を鳴らし、にたりと笑った。上から下まで視線で女を舐めまわし、女の前髪をぐいと掴んだ。女は呻きを漏らす。

無抵抗の者に何をするのだと、紫呉は男の手首を反射的に掴んだ。男の顔から笑みが消える。

憤怒の形相を浮かべ、男は紫呉に向きなおった。

「生意気だな」

発する声に、先程までの親しげな響きは無い。紫呉は咄嗟に女を背後に庇った。

「不具のくせに」

低く唸る声は揺れ、焼けた顔は怒りに赤黒く染まっていた。ただならぬ様子の男に、判断を誤ったかと紫呉は歯噛みする。

「何故、不具が聖玻(せいは)を持っている」

男の視線が紫呉の手首に落とされる。そこには牙月が在った。男は目を剥き、牙月に手を伸ばしてきた。

その手を紫呉は払う。唸る男の声は低く、ひどく獰猛であった。紫呉は男の様子を窺いつつ、目配せをして女に逃げるように促がす。

女は迷った様子で、男と紫呉を見比べている。男が拳を硬く握り、振りかぶった。

紫呉は屈んだ。ごう、と拳が風を切る。地に手をつき、足払いで男の体勢を崩す。砂埃を舞い上げて、男が倒れた。

立ち上がる紫呉の手を、女は掴んだ。赤い唇には笑みが浮かんでいる。前髪の向こう、覗き見える瞳は楽しげだ。

「行くよ」

こっちだ、と女は紫呉の手を引いて走り出す。背を男の罵声が追うが、女は止まる事無く駆けた。

可能な限り周囲の地理を目に焼きつけながら、紫呉は手を引かれ

るままに走った。右に左に小路を抜ける。
やがて辿りついた外れの地で、ようやく女は紫呉の手を離した。息を切らしながらこちらを見上げ、ばんばんと肩を叩いてくる。
「いやあ、なかなかにすっきりしたよ」
あはは、と高く笑い、垂れる汗を拭う。
周囲は閑散としていた。乾いた地面の上をかさかさと音を立てて、枯れ草が風に舞う。
ぼろけた小屋が点在している。人の気配は感じるが、皆一様に警戒しているようで、肌にひりひりと痛い。
「ねえ、アンタ」
上がった息も落ち着いた頃、女は紫呉を見上げて首を傾げた。
「もしかして口がきけないのかい」
そういうわけでは、と否定する前に、女は言葉を継ぐ。
「それ」
と、紫呉の左手首の牙月を指差した。
「口がきけなくなる前に貰ったもんなんだろ？　口がきけなくなったのは最近かい？　分かるよ、そんなにすぐには聖玻を手離せないよねえ。アタシもそうだったさ。右目無くしてしばらくは、手離せなかった」
矢継ぎ早な女の言葉に、紫呉は口を挟む隙を見つけられずにいる。
「つらかったろうねえ」
そう言って女は切なげに微笑んだ。明確な同情が感じられて、どうにも申し訳ない。
だが、否定するのはいけないと直感している。女は、紫呉が唖(おし)だろうと思って庇ってくれたのだろうから。
どうやら男の言っていた『不具』とは、何らかの身体的機能を欠いた者を示すようだ。そしてこの玻璃の里においては、忌まれた存在であるらしい。
聖玻、と男は牙月を指して言っていたか。
そういえば、朝市を行く人々は皆どこかに玻璃玉の飾りを身につ

けていた。あれが、聖玻なるものか。
（なるほど）
だから、水晶の姿をした牙月を身につけた紫呉を、共同体の一員だと見なしたのか。女の姿を見回した男が彼女を不具と見なしたのも、彼女がどこにも玻璃玉を身につけていないからだろう。
女の口振りからすると、玻璃の里の民は皆、聖玻を与えられている。だが不具なる者には与えられない。生の途中で身体機能を失った場合は聖玻を手離す必要があり、不具と見なされる。
（胸糞の悪い仕組みだな）
――この里はとても良い里。誰一人悪人などはおりません。
――この里はとても良い里。何一つ不満などございません。
民は満ち足りた声音で、そう言っていたが。
「ほら、見ておくれよこの目」
女は長い前髪を手で除けた。
「せっかくの別嬪が台無しだろ？」
からからと笑ってみせる。しかし、その笑顔が痛々しい。
女の右目には大きな傷があった。眉の中央から目を抜け下瞼に至るまで、目を潰す刀傷が走っている。
「前の男が最低な奴でねえ。酔っ払って、斬られちまったんだよ。で、それがちょうど運悪く……、おっと」
女はきょろきょろと周囲を見回した。
「……ま、ここなら平気だろうがね」
紫呉の肩に手をつき、僅かに背伸びをして耳に口を寄せてくる。
「今の焔様に代替わりして、しばらくの時でね。不具、不具、って急に除け者さ」
馬鹿らしい話だよ、と鼻から長く息を抜く。
という事は『不具』なる存在が生みだされたのは、八重が日生焔を継いでからのことか。
だが何故だ。
何の必要があって？

「偽焔様、だからかねえ」
まるで紫呉の心を読んだかのように、女が言った。
「八重様は、焔様として欠けてる自分がお嫌なんだろうさ」
確かに、八重の容姿は日生の血に連なる者としては異端だ。
日生の者は、皆一様に黄金に輝く髪と、太陽を思わせる赤い眼(まなこ)を持っている。
だが、八重の髪は黒。目も黒だ。だから彼女は、正統な後継であるにも関わらず、焔の名を継ぐ事が無かった。弟である与四郎に、焔の座は譲られたのだ。
そして与四郎の死後、八重は焔の座に着いた。与えられるはずであったその名を、ようやく名乗る事を許された。
だが、里の民に謳われた名は『偽焔』。
「だから、欠けてるアタシたちも、排除したいんだろうさ。……って、勝手にアタシはそう思ってるんだけどね」
風が女の髪を揺らす。隙間から覗く右目の傷が、痛ましい。
「そうでも思わなけりゃ、納得なんてできないさ」
乱れた髪を手櫛で整え、そうだろう、と女は微笑んだ。
その笑顔が悲しくて、紫呉は思わず傷口に手を伸ばす。つらかったろう、と女は紫呉に言ったが、本当につらかったのは彼女自身であるだろうに。
前髪の向こうで、女は目を丸くした。そしてぷっと吹き出し、そのうちには腹を抱えて大笑いを始めた。
「あっははは！　アンタ、結構タラシだねえ！」
滲む涙を指先で拭い、女は笑い転げる。
そんなに笑われるような事をしただろうかと、紫呉は首を傾げた。
ひいひいと息を継ぎ、いやあ悪い悪い、と女は紫呉の肩をぽんぽんと叩いた。
「アタシは夢緒(ゆめお)ってんだ。アンタは？」
あー笑った笑った、と夢緒はまだ喉を震わせている。
何だか釈然としないが、紫呉は乞われるままに己の名を爪先で土

に書こうとして、やめた。屈んで、指先で書く。その隣に謝辞の言葉も沿える。助けて下さってありがとうございます。

　それを目にした夢緒は、また腹を抱えて笑い出した。

　やはり釈然としない思いで、紫呉は首を傾げた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

１０　瑠璃治安維持部隊乾第壱班屯所

＊＊＊

三

　影虎は乾壱班の屯所へと向かう道中に在った。
　昼過ぎの陽光に目が眩む。そこここで鳴く蝉の声が、鼓膜をわんと震わせる。
　氷売りに冷やし果売り、金魚売りに風鈴売り。道を行く商人は涼を売り歩く者であるというのに、客を引く声は暑気に負けず勢いよく、見れば何やら一層暑さが増すようだ。
　その声を笑顔でかわし、影虎は人々の隙間を縫って歩く。
　紫呉が瑠璃を発ってから数日が経過していた。当たり前の事だが彼から便りはなく、あちらでどのように過ごしているのか知る術は無い。
　もしも連絡があるのならば、それは紫呉の身に何かが起きた時だ。二の腕に咲く桔梗の墨で、紫呉が何者であるかは、捕らえた者も知れるだろう。となると、必ずや瑠璃に知らせは届く。悪い知らせだ。だから、連絡の無い今は、紫呉の安全は確約されているのだと思っていて良い。
　そう分かっては、いるのだが。
　影虎は髪を掻いて乱し、本日何度目になるか知れぬ溜息を吐いた。不安、なのだろうと思う。何をしていても気はそぞろだ。
　帰りを待つ側とはこんなにも落ち着かぬものなのかと、そんな事を考えて思わず自嘲を零す。
　帰りを信じていないわけではない。信じている。帰らないわけが

ない。
紫呉の腕は確かだ。それに聡い。こたびの事は無鉄砲で軽率な行動ではあるが、愚行はするまい。
分かっている。信じている。
だけど。
舌を打ったのと、乾壱班の屯所へ辿りついたのがちょうど同時だ。まだ年若い門衛にぎょっとした顔をされてしまった。影虎は苦笑して手をひらりと手を振る。
通り過ぎ、数歩行ったところでやはり思い直し、振り返る。
「莉功さんもう来てる？」
「あ、はい。夜勤ですので、ずっと詰めてらして」
「そっか。ありがとな」
舌打ちされてしまったとまだ勘違いしているのか、門衛の態度はやけに硬い。敬礼の姿勢を取る彼の肩はがちがちに固まっていた。
そう緊張しないでよお兄チャン。ふざけた女声で言い残し、影虎は屯所内へと足を運んだ。
屯所の中は比較的に涼しかった。蝉の声が少しばかり遠ざかったから、そう思えるのかもしれない。
部隊長の詰めている部屋へと向かう。莉功は、平時の際はそこにいるはずだ。
戸越しに一声かけると、入れと莉功の声が返ってきた。
「俺さあ」
戸を開ける影虎に、莉功は声を重ねる。
「紫呉くんに壱班来いって言ってたはずなんだけど」
机に片肘をつき、足を組んだ莉功が不機嫌な声で言った。
室内には莉功の姿があるだけだ。他の部隊長たちは所用で出ているらしい。
「なーんで来ないのかにゃー」
莉功はこちらをちらりとも見ようとしない。
ふざけた体を装っているが、纏う空気は張り詰めている。珍しく

怒気を露にする莉功に多少気圧されつつ、影虎は莉功の向かい側に腰を下ろした。
「なあ、何で来ねえの？」
莉功はようやく影虎に視線を合わせた。
「つか、俺だけじゃなくて彰司も来いって言ってた気がすんだよね。仮にもさー、壱班の部隊長なわけよ俺らは。従ってもらわんと、困っちゃうんだけどねー」
「何のことすか」
「あれ、もしかして知らんの？」
眼鏡の向こうで莉功の目が丸くなった。
「何か紫呉くんの事だったらさあ、全部知ってるっつーか把握してるっつーかだと思ってたわ」
「んな事ないすよ」
「槙がさ、……ああ、槙は知ってるよな？」
それは知っている。例の、あの店を騒がしにきていた荒くれ者だ。
槙が死んだという連絡は受けた。阿片による中毒死であろうという事も。その腰ぎんちゃくであった二人もまた同じく、死亡した事も聞いている。
「その槙が死んだ時に紫呉くんが側にいたんだよね。疑ってるとかじゃあねえけど、参考人としてちょっと来ておくんなさいよって、言ってたはずなんだけどにゃー、あー、眠いわー」
莉功は眼鏡を外し、目頭を指でほぐした。
なるほど、得心がいった。
壱班の部隊長の言葉に背いたとなると、罰は免れない。しばらくの謹慎は確実だ。
紫呉とてそれは分かっていただろう。だがそれを凌駕する程の、激情だったのか。
もう嫌だと、己のせいで誰かが苦しむのはもう嫌なんだと、もろく崩れそうな声を落とした主を思い出す。
「まあ鳥獣隊のお仕事的な何かが急に有ったのかなー、って俺も思

ったわけだよ。でもそしたら俺らにも連絡はくるっしょ？　でも無いしさあ。じゃあ何で紫呉くん来ないんだっていうね。だからまあ、温情かけるっつったら恩着せがましいけど、まあ、待つのももう無理なわけで」

眠いわーとぼやきつつ、莉功は机につっぷした。制帽が机上に転がる。

「で」

転がった制帽を掴まえ被り、莉功は顔を上げた。眼鏡を外している所為か、目つきがすこぶる悪い。

「影虎くんは何しにきたの」

「話しておきたい事があるんすよ」

「ふうん？」

制帽で口元を隠し、莉功は片眉を上げる。

「……じゃ、移動しよっか」

他の者に邪魔をされたくない話だと感づいたのだろう。察しの良い男だ。莉功は眼鏡をかけなおし、立ち上がった。

莉功に付き従い、部屋を後にする。

分かれ道にさしかかった時だ。ふいに莉功が立ち止まった。

「その前に俺も確認したい事あるんだけど」

左に曲がろうとしていた莉功だったが、そう言うなり、右にくるりと向きを変える。制服姿の背を影虎は黙って追った。

やがて着いた先は安置室だ。瑠璃治安維持部隊の一つ、遺体処理を受け持つ肆班と話し合いを持つ間は、ここで遺骸を保管している。

北の位置に所在する事もあり、そこはひんやりとしていた。夏の今は、室内に氷柱を立てている。

「槙の腰ぎんちゃくすね」

寝かされた遺骸には覚えがあった。一人は無残に顔を裂かれている。もう一人は腹に深い刺し傷が見られた。

「そ。戸籍も身元も確認済み。受取人はおらず。現在肆班の処理待ち」

莉功は氷柱の側に屈み込んだ。
「両名とも先日華芸町にて発見。発見者は瑠璃治安維持部隊乾第壱班隊員。争う声がすると住人の通報を受けて現場に向かう。発見当時既に息は無し。周囲には阿片と金銭があったことから、それをめぐっての悶着と見られる。ガイ者甲――昭夫の方だな、こいつが、ガイ者乙――こっち、浩志ね、こいつの腹を刺す。逆上した浩志が昭夫の顔を斬りつける。浩志はそのまま腹の小刀を抜く間もなく死んだ。……てのが、一応の見解」
また、と立ち上がった莉功が、影虎の隣に並ぶ。
「凶器となった小刀も発見済み。一つは浩志の腹に残留。もう一つは浩志が手にしていた。浩志の手のひらに血の痕は無く、死亡後に誰かが持たせたという可能性は低い。……はずだけど、零ではないと、俺は思うね」
まあ俺だけじゃないだろうけどそう思ってんのは。付け加え、莉功は鼻から息を抜く。
「まあとにかく何にせよ、相打ちって事でカタつけようぜってのが、壱班の総意だな」
つまりは、他に関わった者がいるはずだと莉功は見なしているのだろう。
確かに、それは影虎も思う。
甲――昭夫の顔は、ちょうど上下を真二つに分かつようにして斬られている。傷は深い。だが綺麗だ。斬る事に慣れた者に因る傷だ。武器の扱いに長けた者ではないと、こうはならない。
「お前さんらのお仕事じゃねえよな？」
莉功は眼鏡越しに鋭い眼光を送ってくる。その視線を受け止め、影虎は頷いた。
「さっき莉功さんが言ってたじゃないすか。鳥獣隊の任務なら、他の者にも連絡は行く」
「だよねえ」
「何でそんな事聞くんすか」

「こんな芸当できんの、紫呉くんぐらいのもんじゃねえのって思ってさあ」
「任務でも何でもねえのにあいつが人を殺したって？」
「……怖ぇよ目が」
そう笑いながらも、莉功は影虎の視線から逃げようとしない。
蝉の鳴き声が聞こえる。
遠く、行きかう隊員たちの足音がする。
「悪い。そうは思っちゃいない」
やがて莉功は影虎から視線を逸らし、真剣な面持ちで瞑目した。
「ま、浩志の奴が、実はえらく腕の立つ野郎だったって事にしとくよ」
外部犯とかめんどくせえし。目を開けた莉功は言いながら、氷柱の側に舞い戻った。屈んで、制帽で顔に風を送る。
「んで本題だ。影虎くんの話って何」
「……警戒、しといて下さい」
影虎は割れた昭夫の顔に目を落とした。横顔に莉功の視線を感じる。
加羅は紫呉に奪うと言った。
紫呉が奪われて厭うもの。それは金でもなく、地位でもなく、情を繋いだ相手だ。その彼らを奪うと、加羅は告げたのだ。
推論ではある。だがきっと、答えに近いだろうと影虎は思っている。
紫呉は自分のせいで誰かが傷つく事を、苦しむ事を、ひどく厭っている。それを知っての事だろうか。
おそらくは、雪斗を襲撃したのも加羅だ。
紫呉が交流を持つ相手の中で、己たち二影や鳥獣隊を除けば、雪斗は紫呉との距離が最も近い。それに雪斗は武力を有さず、人の出入りが多い華芸町で一人住まいだ。襲撃するには、一番容易い。
依然として加羅の目的は知れない。だが、目的を果たす手段として、奪うという行為が選ばれた。いや、奪う事それ自体が目的なの

かもしれない。分からない。何にせよ、真意なぞ知りようがない。
「警戒ねえ……」
莉功がさも面倒臭いと言いたげな声で呟く。影虎は無言で頷いた。
莉功は非戦闘員ではない。中々に腕が立つ事は影虎も知っている。そうでなければ、壱班の部隊長など勤められない。
彼ならば雑魚を一層する事は容易いだろう。だが、それでも注意を促がすべきだと思った。彼に何らかの害が見舞って、傷つくのは紫呉なのだ。それは嫌だ。避けるべきだ。
莉功は唸りながら目を瞑っている。
紗雪は、須桜がどうにかするだろう。須桜もきっと、影虎と同じ結論にたどり着いている。
雪斗は保護舎に在るうちは安全だ。周囲は壱班の者で固められている。わざわざ侵入に困難な場所を襲撃する必要は、その危険（リスク）と比べれば感じられないように思う。
親族は心配するだけ無駄だ。支暁殿は幾重にも護られている。
浅葱は、平気なはずだ。浅葱は情報屋だ。相手にとっても有益な情報を手にしているかもしれない。その相手を無闇に手にはかけまい。
また、浅葱に接する事はつまり情報を与える事。浅葱と繋がりの有るこちらに情報が流れる可能性があるという事。ならばきっと、おいそれと接触は持たないはずだ。
「どんくらいのもん？」
「俺の片足、奪えるくらいの相手」
「……そりゃ、おっかねえ」
片目を開け、莉功は影虎の右足に視線を送った。
この義足と付き合うようになって、もう六年が経つ。
（六年）
無為に過ごしてきたわけじゃない。あの頃に比べればずっと、己も強くなったはずだ。義足との付き合い方もうまくなった。
（護ってやるさ）

今度こそは。
失った影虎の足元に蹲って紫呉は泣いた。護らなくて良い、だから死ぬなと。
己とて、腹に風穴を開けられているくせに。しかも、友と慕った相手にだ。己とて深い傷を負ったくせに、それでも泣いたのだ。あの馬鹿は。己の為ではなく、何も出来なかった不出来な『影』の為に涙を流した。
主のそんな姿は見たくない。違う。させるべきではないのだ。そんな事を。
ならば戦え。護れ。強く在れ。
「りょーかい。洋には、悟さんとこ行くように言っとく」
制帽を被り直した莉功は、お手上げといった態でひらひらと手を振った。
悠々館の主である柊悟もまた、鳥獣隊『鳩』の一員である。今は茶屋の主を勤める彼だが、元は瑠璃七官のうちの一つ、軍事を司る赤官の長であった男だ。腕は信頼に足る。
彼の息子である崇もまた、鳥獣隊『鳩』の一員だ。普段はその名の表す通り伝書鳩の役割を司る事の多い彼らだが、一通りの戦闘訓練は受けている。
莉功の弟である洋は、鳥獣隊『雀』の一人だ。里に『正しい』情報を流す事を主としている為、普段は戦闘に従事していない。一応の戦闘訓練は受けているものの、彼は戦闘を得意としていない。一人にするには、やや不安が残った。
「俺は、ま、出来るだけここにいるようにするさ」
ここ、と莉功は首と視線を巡らして壱班の屯所を見回す。
「あー、おっかねえおっかねえ面倒くせえ。つか、影虎くんが護ってくれりゃあ俺は面倒でなくて良いんだけどねー」
「俺にはやる事があるんで」
半ば本気じみた莉功の愚痴を、影虎は微苦笑で受け流す。
留守を頼むと紫呉は言った。命を下した。

「俺にしか出来ないんだ」
その命令に用意された答えは、諾のみだ。
＊＊＊

11　再び外れの地

＊＊＊

装身具、と紫呉は唇だけで音をなぞって首を傾げた。が、夢緒は気付かずに話し始める。
「そういやアンタはどこの外れにいたんだい」
という事は、ここ以外にも同じような土地があるのか。外れと呼ばれる、不具と見なされた者達が住まう場所。
答えられずにいると、夢緒はそっと体を寄せ、首に両腕を回してきた。
「すまないね。言いたくないなら良いんだ。いらない詮索をしちまったね」
唐突な抱擁に、紫呉は目を白黒とさせる。
「ここの外れの売りもんはまだまだ良いもんだが、場所によっちゃひどいから……。ごめんね、嫌な事を思い出させたかい」
女の柔らかな体から、蒸すほどの体温が伝わってくる。首を振れば互いの髪が触れあい、さらさらと音を立てた。
「この襟巻きも、痕なり傷なりを隠してるんだろ？」
襟巻き越しにするりと喉元を撫でられ、やはり紫呉は首を振るばかりとなる。事実、同情を寄せてもらえるような場にいたわけでもなく、痕があるわけでもないから否定は本当の事であるのだが、夢緒はそうは受け取らずに、首に回した腕の力を強めた。
「かわいそうにねえ。つらかったろう」
子供をあやすように、ぽんぽんと背中を撫でられる。
優しい女だ。優しすぎる程に優しい。思い込みが激しいのと、人の話を聞かないのが難点だが。
紫呉は夢緒の肩を軽く押して、体を離した。大丈夫です、と唇で音だけをなぞって、ゆるく首を振る。
「……そうかい」
伸ばされた髪の隙間から覗く夢緒の目には、僅かに涙の膜が張っていた。しかし微笑みを作る紅い唇はそのうちに更に笑みを大きくし、にやりと表現するに相応しい意地の悪げな笑みに変わった。
「ごめんねえ。純真なボウヤにひどいことをしちまったかねえ」

にやにや笑いながら、夢緒は紫呉の肩をばんばんと叩いてくる。
「顔が赤いよ。可愛いねえ」
抗議しようと紫呉は口を開くが、結局は言葉を飲み込み、俯いた。襟巻きを引き上げ、赤い顔を隠す。
純真を気取るわけではないが、事実、慣れていないのだ。二影や親族と触れ合うのとは、訳が違う。どう接して良いのか分からない。戸惑う。
夢緒はけらけらと笑い、からかうように紫呉の髪を撫でている。しばらくの後にその手は優しいものとなって、乱した髪を撫で付けるようにゆるゆると髪を梳き始めた。
「……大丈夫。きっと、この生活もいずれは変わるさ」
手を離した夢緒は、瞑目して深く息を吐いた。しばらくの後に目を開け、まるで祈るように太陽を見上げる。眩さに目を細め、陽光を抱きしめるかのように、胸に両手を当てた。
「妙なるかな、聖なるかな」
夢緒の頬を陽の光が撫でる。
「我らが愛し子」
再び瞑目し、夢緒はゆっくりと呼吸を繰り返す。薄く唇を開き、降る光を飲み込むように。
彼女の周囲に静謐な風が吹くようである。無く蝉の声も遠く、声無き祈りの声を夢緒は抱き、陽光に身を晒している。
ゆるやかに目を開け、夢緒は紫呉に向き直った。その頃にはもう祈りの風情は見られず、鉄火肌の夢緒の顔をしていた。
「おいで、案内するよ」
茶色の髪をくるりと翻し、夢緒は背を向けた。蝉の声が空気を揺らしだす。
「ここの外れじゃあね、ハッパや粉以外の主な売りモンは装身具なんだ。ほら、見えてきた。あっちの工房の方で、色々作って市街の方に売りにいくんだよ」
夢緒が指差した先に工房が見えた。工房といってもそこいらの粗

末なあばら屋とたいして変わらず、少し広く大きい程度の小屋だ。
割れた窓から中を窺い見る。室内では男女が地べたに座り、研ぎ石のようなもので何かを磨いていた。綾紐を縒り合わせている者もいる。羽や木の実を器用に貼り合わせる姿も見えた。
奥には釜があるようだ。燃え盛る赤は、室外に立っていてもその熱を感じさせる。
「あの釜で、聖玻を作っているんだよ」
ただし、と夢緒は唇を曲げた。
「偽物のね」
釜を見つめる目は、睨むような強い光を宿していた。
「本物の聖玻と違って、ただの硝子玉ではあるけれどもね。じっと見られない限りは、ばれないもんだよ」
それは、平気なのだろうか。罪に問われる行為だと思われるのだが。
紫呉の言いたい事を察したのだろう、夢緒は一つ深く頷いた。
「ばれたらそりゃあ、罪に問われちまうさ。それでもね、アタシらは不具でなかった頃に戻りたい。以前と同じように、人として生きたい。人として扱われる事を知らずに育った奴らを、人にしてやりたい。……うわべだけでもね」
そう言った声は悲しげであった。しかし諦めの色は見えなかった。心からそれを望んでいる事が感じられた。
「与四郎様が生きていた頃の里で、アタシらは人として生きたいんだ」
アンタもだろう。確かめるように、夢緒は紫呉を見上げた。
紫呉は玻璃の民ではない。瑠璃で生まれ、瑠璃で育った。
だが、この里の歪みには不気味なものを感じる。腹の底に得体の知れぬ気持ち悪さが渦巻く。
隣里で生きてきたというのに、紫呉は『不具』なる仕組みを知らずにいた。玻璃の政治体制は、外堀だけではあるが一応は学んでいるはずなのに。

（そうか）
今更気付いた。あの男が口にしていた『組』とは『八人組』の事だ。これも、八重が焔を継いでから作られた仕組みだ。
八戸の家がそれぞれを監視しあい、里に叛く姿勢が見られるようであれば、上層部に報告する。里に不利益をもたらすような行動・思想を抱いているようならば、やはり報告が必要だ。危険分子を潰す為に作られた仕組みだと聞く。
八人組も不具も、八重が焔となってから出来た仕組みだ。八人組の事はちらと耳にした事があるが、しかし不具なる仕組みを耳にした事はない。
つまりは、隠されている。
二里は相互扶助の姿勢を保ってはいるものの、それぞれの政治には不介入だ。だからお互いどのような圧制を敷こうとも、口出しをする資格は無い。
よって、政治体制を隠す意味は無い。
（だが隠した）
何故だ？　何故、八重は不具なる制度を瑠璃に隠した。
「どうしたんだい、難しい顔しちまって」
はっと紫呉は目を瞠る。
「さっきの野郎に、アタシが来る前に何かひどい目にでもあわされたのかい？」
心配そうに声を震わす夢緒に、紫呉は慌てて首を振った。優しい彼女に、無用の心配はかけさせたくない。
「なら良いけど……。そうだ、これから買い物に行こうかと思うんだけど、一緒に行くかい？」
それはありがたい申し出だ。今朝の走りぶりからすると、彼女は里の裏路地にも詳しそうだし、里を知るにはとても助かる。紫呉はこっくりと頷いて同意を示した。
夢緒は屈み、袂から取り出した硝子の装身具を足首にはめた。確かに、ちらと見ただけでは本物か偽物かは分からない。

「さっきは偉そうな事言っちまったけど、これはね、普段は使わないんだ。捕まっちまうのは怖いからね。モノを売りに行く時はいつも通りのアタシらさ」
裾を払い、夢緒は立ち上がる。
「これは、買い物に行く時に使うだけさ。不具が相手じゃ売れねえとか、ふざけた輩がいるからね。アタシらが売るもんは買い叩くくせにさ」
よし、と手を打ち合わせ、夢緒は紫呉の手を取った。
「じゃあ行こうか。さっきの辺りはしばらく近寄らない方が無難だけど、別のところなら大丈夫だろうし、……ん？　何だい？」
子供じゃないのだから、と紫呉は夢緒の手をやわく振りほどこうとする。が、夢緒は逆に手を握る力を強めてきた。
「可愛いねえ。こりゃとんだウブなボウヤを拾っちまったもんだよ」
含み笑いながら、夢緒は紫呉の顔を覗き込んでくる。
言いたい事は山ほどあったが、何から文句をつけて良いものか。適当な言葉が見当たらず、紫呉は言葉を飲み込んだ。その代わりに、わざとしく大きな嘆息をする。
せめてもの意趣返しにと、指を絡めて手を繋いでやる。だが夢緒はけらけらと笑うばかりで、より一層紫呉の不満は積もるばかりとなった。

12　蝉時雨降る昼市

ざわめきが聞こえる。市場を満たす喧騒は低く尖り、不安を呼び覚ますようである。

空気を揺らすどよめきは夢緒にも伝播したらしい。夢緒は紫呉の手を一層強く握り、こちらを振り仰いだ。何があったのだ、と言いたげな夢緒に、紫呉は首を振る。

ざわめきの中心には人垣があった。二人はその垣の後方に陣取り、隙間から様子を窺い見た。

垣の中央に、揃いの羽織を着た者達が見える。白の長羽織だ。風に揺れて覗いた羽織裏は、黒味の強い紅色だ。

「護焔隊……」

夢緒が小さく呟いた。

そうか、これが耳にしていた護焔隊か。日生八重が、己の守護の為に創設した武装集団。

護焔隊の面々は一人の男と対峙している。男は足を負傷しているらしい。蹲り、歯噛みしながら護焔隊を見上げていた。

「ねえ。きみ、さ」

カラン、と高下駄の音が響いた。

「今、ぼくたちを見て、逃げたよ、ね」

汀だ。

斉藤汀。護焔隊の隊長を務める男。

汀はカラコロと高下駄の音を響かせて、懐手のまま男に近づく。はためく白の長羽織が眩い。

細い目をさらに細め、汀は男の眼前に立った。

「言い訳があるなら聞く、よ？」

笑う。まるで、蛇が舌なめずりをするように。

男は食い縛った歯の隙間から、荒い呼吸を漏らしている。睨みあげる瞳は力強い。

「ぼくねえ、きみの顔に見覚えがあるんだよ、ね」
ほとんど白に近い薄茶の髪をかき上げ、汀は何かを思い描くように空を仰いだ。
「見回りの時に、いっつも見かけるんだよ、ね」
もしかして、と汀は空を仰いだまま、一際笑みを深めた。
「監視。……されてるの、かな？」
男の肩が揺れた。
「ぼくたちの見回り経路を、調べてるの、かな？」
喉を震わせ、汀は笑う。ささめくような小さな笑いは、やがて哄笑に変わった。
「ふ、ふふふ、あは、あはははは！」
汀の笑み声が市場に響く。市場にはいつの間にか、静寂が満ちていた。ただ、蝉の鳴く声ばかりが耳を打つ。
「愚かしい、ね」
かくりと折れるように首を曲げて、汀は男を見下ろした。
絞り出すように、男は呼吸を繰り返している。ごくりと、男が唾を嚥下する音すら聞こえそうな程、周囲は静けさに支配されていた。
「……あああ」
男の喉から、震える声が発される。
「あああああ！」
わななく声を叫びに変えて、男は懐から小刀を取りだした。小刀の鞘を払う。
いや、払おうした。男は柄に手をかけたまま、ぴたりと動きを止めた。
その喉元には、打刀の切っ先が突きつけられている。
「懸命な判断ではないな」
聞いた声だ。
男の喉元に切っ先を突きつけたまま、加羅は言った。一つに束ねた蜜色の髪が、高く昇った日の光を受けて煌いた。
紫呉は身が震えるのを感じていた。手に絡む夢緒の手をほどき、

襟巻きを引き上げる。
動く気配は感じた。鞘走りの音は聞いた。
しかし、抜刀のその瞬間は見えなかった。いや、視覚としては捉えていた。だが、抜刀したのだと知覚したのは、加羅が男に切っ先を突きつけるその様を目にしてからだ。
汗が頭皮を伝い、首筋に流れていく。奥歯を噛みしめ、ともすれば昂り荒くなる呼吸を押し殺す。
紫呉は襟巻の下で、ゆっくりと長く息を吐いた。熱い体、早まる鼓動。今すぐにでも斬りかかりたいのを、必死で抑える。
「叛意あり、という事、だね」
汀は薄い唇を笑みの形に曲げた。
加羅は、藍鞘を皮の腰帯（ベルト）に差した。隊服の長羽織がはためく中、加羅だけが隊服を身に纏っていない。白の薄物、黒の洋袴（ズボン）。澪月のあの雨の夜に見かけた着姿であった。
「粛清を」
静かな市場に、汀の声が朗々と響いた。人垣が息を呑む。張り詰めた空気が息苦しいほどだった。
加羅は左の手を鞘に添えたまま、男に視線を落とす。
「早計ではないのか？」
ク、と汀が喉を鳴らした。
「見た、でしょう？　今、この男は、ぼくたちに刃向かおうとした。もしかして、若君の御身を傷つけようとしたのかもしれません、ね」
加羅はそれには答えずに、男を眺めている。やがて切っ先を退け、流れるような動作で刃を鞘に納めた。
キンと鳴る硬い音に、男はびくりと肩を跳ねさせた。何か言いたげな視線で、加羅を見上げる。
「捕らえて、吐かせるべきじゃないのか」
男を見おろす加羅の顔には、笑みの片鱗も窺えない。
「若君」
ことさらにゆっくりと、汀が呼びかける。まるでがんぜない子供

を諌めるような調子が、ねっとりと絡みつく。
「隊長は、ぼくです、よ」
加羅は汀には一瞥もくれずに、男を見つめたままでいる。
「粛清を」
汀は己の指から、何かを抜き取った。銀の指輪だ。それは見る間に、一振りの打刀に姿を変えた。陽光の中、黒塗りの鞘が染みのように真黒く綾を成している。
汀はそれを、ずいと加羅に差し出した。
人垣がさわさわと音を発し始める。恐る恐る、人々がその場を去って行く。
だが多数は尚も残ったままだ。一歩二歩の距離は取ったものの、固唾を飲んで男と護焔隊を取り囲んでいる。
加羅は黒塗りの鞘を睥睨した。しかし手は伸ばさずに、強く汀を睨み据えた。
「下がれ斉藤」
汀は、それは楽しげに笑みを浮かべた。薄い唇をニィと曲げて、細い目を更に細めてこっくりと頷く。
視線で部下達に下がるように示し、汀もまた、数歩の距離を取った。
柄に手をかけ、加羅は刃を抜いた。男の背後に立つ。
「何か言い残す事は?」
わずかな瞑目の後、加羅は静かな声を落とした。
男は、先程とは打って変わって落ち着いた様相をしている。うっすらと笑みを浮かべて、姿勢を正した。
「偽焔滅ぶべし」
正座し紡いだ言葉が、空気を裂く。
「……我らの希望は潰えていない。我らの希望は、尚も美しく照り輝く」
嘲弄を含んだ声音は毅然としていた。強い眼光が、汀を射る。
だが汀はやはり笑うばかりだ。黒い眼には、男の紡ぐ言葉を愉し

むような色が有る。
加羅が向陽を振りかぶる。乱刃が眩い程に煌いた。
「我らの希望は決して消えはしない！　同胞よ、我らの希望は尚もまば、べ、げぇ、え」
言葉を遮るように、男の首に小刀が刺さった。ごぽりと濡れた音と共に、男の口から鮮血が溢れだす。
男は、どうと横様に倒れ伏した。砂埃が立ち、男の死相に白くもやをかける。
男の口から、ヒュウヒュウと空気の漏れるような音が聞こえる。
口から首から溢れた血がどろどろと地面に広がり、加羅の長靴（ブーツ）の爪先を赤く濡らした。
やがて人垣から悲鳴があがった。女の悲鳴だ。しかしその女は護焔隊に視線を寄こされ、慌てて口を押さえた。ガタガタと震えながら、悲鳴を飲み込もうと必死の様子だ。
その女だけではない。人々は悲鳴を飲み込み、それでも事の様を見守っている。カチカチと歯の鳴る音、ひぃと喉が掠れる音。押し殺した嫌悪、恐怖、畏れ。様々な感情が渦を巻いていた。
振りかぶっていた向陽をゆっくりと下ろし、加羅は視線を巡らせた。
「……首を抱かせてもやらないのか」
紅緋の眼が、汀の姿を捉えた。
汀は小刀を放ったその姿勢のまま、浮かべた笑みをなぞるようにして唇をなめずった。
「こういうのはさっさとやらない、と。何かの暗号だったら、どうするんです、か？　ベラベラと喋らせちゃダメ、でしょ？」
汀は手を下ろし、懐手を引き直した。長羽織の裾をばたばたと鳴らして、風が駆け抜けていく。
「懸命な判断ではない、な」
先程の加羅の言葉を、己の声で汀はなぞる。加羅は見るからに不快そうに目を細めた。

絡み合う二人の視線の下で、男の呼吸が止まった。静寂の中、遠く鳴く蝉の声が響いている。
柄を握る加羅の手に、力が込められたのが分かった。甲にくっきりと骨の形が浮かびあがる。
胸が上下するのが窺えた。らしくもない。得物を手にしている時は、呼吸をひた隠すのが常であるのに。
そのうちに加羅は、ふ、と息を抜いて汀から顔を背けた。提げた向陽を常態の瑠璃の数珠に変じさせ、左の手首にはめる。
それが合図になったのかは知らないが、他の隊員達が男の死体の処理を始めた。布で包み、二人がかりで遺骸を運ぶ。
歩みだす護焔隊を避けて、人垣が割れる。ささめく声は徐々に大きくなり、ほどなく市場を興奮で埋め尽くした。
残された血だまりを見ていた加羅が顔を上げ、隊員の後に続いた。
思わず紫呉は右の足を踏み出す。
だが、踏みとどまった。
追ってどうする。斬るのか。この衆目の中で？
（馬鹿な）
できるわけがない。
こめかみがドクドクと脈打っている。冷静になれと、どこかで声がする。
数歩駆けて踏み込めば、届く距離だ。背に届く。その背を撫で斬れる。
届くのに。
届くはずなのに。
ふいに、加羅が振り返った。
ちらと寄こされる視線は、確かに絡み、一瞬でほどけた。
「……っ……は、ぁ」
詰めていた息が抜ける。
紫呉は口中に溜まった唾液をこくりと飲み下した。
絡んだ視線には、何の表情も無かった。面めいた笑みも、揶揄の

調子も、何も。
遠ざかる背を見送る。加羅の長靴を濡らした男の血が、加羅の歩みと共に跡となって地面を彩っていく。
人垣がばらばらと砕けだす。紫呉はギリと音を立てるほどに噛みしめて、加羅の背に背を向けた。固めた拳がぶるぶると震えていた。
散り散りになりゆく人々に、紫呉たちもまた続こうとした。
途端、背に強い視線を感じた。
咄嗟に紫呉は振り返る。這うように、舐めるように、視線が体をのぼっていく。
辿った先には、汀の姿があった。
汀はニィと笑った。
白い歯がこぼれる。
なめずる舌先がいやに赤い。
悪寒が背を駆けた。汗がうなじを伝って、背を流れ落ちる。
その向こう、汀を呼ぶ隊員の声がした。それにひらひらと手を振って、汀もまた隊に続く。
視線がほどけるなり、どっと汗が吹き出した。
浴びる日は確かに熱く、まといつく空気も確かに暑い。
そのくせ、皮膚を這う恐怖ばかりが寒い。
(恐怖)
そうだ、恐怖だ。確かな恐怖を感じた。
あれは殺気だ。怒りも憎しみも含まない、純然たる殺気。
純白の、欲。
「大丈夫かい？　顔色が優れないよ。……血が苦手だったかい？」
夢緒の声もどこか遠い。わんと広がる蝉の声が頭の奥で鳴り響いている。
頷いたのかどうかも、定かではなかった。
今も地面には、男の残した血溜まりが赤く蹲っている。

13　瑠璃へと続く間道

あの目はいけない。あの黒い眼はいけない。
飲み込むような、舐めるような、這うような、真黒い眼。
あれから、遠ざからなくてはいけない。
直感だ。理由など分からない。
ただ、嫌悪した。恐怖した。捕らわれてはいけないと、ひたすらに心身が厭っている。
それに汀は紫呉が何者かを知っている。
如月の人間が供も連れずにこの場所にいる、それはつまり断りもなく玻璃に立ち入ったという事だ。
八重の耳に入ったら大事となるだろう。いや、汀は八重を守護する護焔隊の隊長だ。必ず八重の耳に入るに違いない。
ならば、一刻も早く立ち去り、瑠璃に戻るべきである。
理性ではそう分かっている。玻璃にいた、という状況証拠を消さねばなるまい。いつになるかは分からないが、玻璃から知らせが入った際、紫呉が瑠璃にいるという状況を作る必要がある。
早く立ち去るべきなのだ。分かっている。分かってはいる。
もしかしたら、既に瑠璃に知らせが入っているのかもしれない。手遅れなのかもしれない。
分からない。判断のしようがない。不安が胸を締め付ける。
とにかく、早く戻るべきなのだ。
しかし、紫呉は尚も玻璃の地に在った。そろそろ夜は色を深めようとしている。昇る月も皓々と冴え冴えしい。
嫌になるほど分かっているのだ。しかし、だがしかし、加羅は奪うと言った。それが嫌なら追って来いと言った。それに従いここまで来たのに、愚かしいと分かりながらも従い来て、なのに、何も成していない。追えと、捕まえろと加羅は言ったのに。奪われたくないのなら、と。

だというのに。何もできず、ただ見ているばかりだった。加羅の背を見送るしかできなかった。
まただ。また何も出来ずに失うのか？
見ているだけだった。あの十三の夜も、翔太の首が舞う様を見ているしかできなかった。
違う、違う違う。それも己の所為だ。翔太は己を護って斬られたのだ。殺された。首を斬られて。
それも、己の無力が招いた結果だ。
もう嫌だ。己の所為で誰かが苦しむのも、哀しむのも、死ぬのも嫌だ。もう嫌なんだ。
『おれは奪うよ』
奪われるのも、もう嫌なんだ。
だから追ってきたのだ。なのに、何も成していない。何も。奪うと、加羅は、そう言ったのに。
紫呉は長く息を吸い込み、同じだけの時間をかけて、長く息を吐いた。肺が痛む程に、長く長く、息を吐く。
（……早く、戻らないと）
己一個人が受ける痛み。如月紫呉が瑠璃の里に及ぼす損害。どちらを避けるべきかは、分かっている。
紫呉は握った両の拳で、閉じた瞼を強く押さえつけた。
「……戻らないと」
手を離し、顔を上げる。思った以上にだらりと腕が垂れて、指先が砂利に触れた。割れた窓から差し込む月明かりが、指先を照らしている。
外れの地のあばら屋である。本来ならば夢緒の住処なのだが、気を使って紫呉に貸し与えてくれたのだ。彼女はしばらく、友人の宅で過ごすと言っていた。
紫呉はそろそろと指を動かし、砂利の上に書いた。ありがとうございました。
しかしすぐに思い直して、手のひらで消した。彼女の記憶に己を

あまり留めさせない方が良い。最初からいなかったのだと、そう思っていてくれる方が良い。もしも問われた際、咄嗟に、そんな奴は知らないと答えられるくらいに。己と彼女が繋がっていたと、何らかの事で汀なり加羅なりに知られてしまうのが怖かった。

立ち上がり、あばら屋を後にする。手のひらについた砂利を叩いて落とした。

全く、何をしているのだ。玻璃に来てしたことといえば、巻き込む可能性のある者と禍根を無駄に増やしたばかりだ。

（愚かだな）

己を嗤い、夜道を行く。時折すれ違う姿があったが、誰も紫呉に気を取られてはいないようだった。家路につく足取りは軽く、待つ家族があるのだろうと感じた。すれ違いざまに漂う酒気も陽気で、それがやけに胸を締め付けてくれる。

壁に手をつき、足を止める。夏の夜の空気はぬるく、垂れる汗が不快だった。包帯の下、傷が痛いやら痒いやらで、とにかく気を削がれてしまう。

紫呉は懐から痛み止めを取り出し、噛み砕いた。喉の奥まで広がる苦味に眉を顰める。だが、効果は既に己の体で実証済みだ。そのうちに効いてくれるだろう。

何しろ、足を止めている暇は無いのだ。休む事無く瑠璃まで、支暁殿まで駆けねばなるまい。

やがて瑠璃へと通じる森が見えてきた。森は黒く夜の麓に寝そべっている。一つ息を吐き、足を踏み入れた。

短い呼吸と、土を蹴り上げる音が響く。気配を隠す余裕は無かった。早く、早く。気ばかりが急いている。弱った体が疎ましかった。

頭上では月が照っているはずなのに、闇に染まった森に覆われてしまい、それも見えない。夜目が利くとはいえ、月明かりも覚束ない森は暗く、時折躓き、転んだ。手をついた折に傷つけたのだろう、手のひらが少しばかりひりひりと痛んだ。舐めると、血と土の味がした。

立ち上がり、幹に手をつき息を整える。
ふいに、背を走るものがあった。
気配を探るが、明瞭ではない。だが、気配を押し殺している、というその張り詰めた空気は感じる。
誰かがいる。
それも複数だ。
背に、視線を感じる。
おとがいから滴った汗が、足元でポツリと微かな音を立てた。
同時に、耳元で風を切る音がした。首を僅かに傾けて躱したそれが、紫呉の眼前の幹に刺さる。
小刀だ。
左手首の数珠に手を伸ばす。牙月の名を呼び、緋鞘の打刀に変じさせた。
背後に迫る足音が踏み切った。上だ。振り下ろされた刃を躱し、抜き様に斬りつけた。
腹から臓物が零れる。男はぐうと唸った。落ちてくる体を、半身を引いて避ける。
どっと土に伏せた男の背に、紫呉は刀を突き立てた。もがく指先は、じきに止まった。
男の背を踏んで、牙月を抜く。締め付ける筋肉が厄介だった。
「良い反応速度、だね」
ぱん、ぱん、と手を打ち合わせると共に、声がした。
「ためらいがない。それでこそ、殺戮としてあるべき姿、だ」
紫呉は血振りして、足元の死体を蹴り転がした。反応は無い。それで良い。
「……斉藤汀」
「おや。覚えていて下さいました、か」
わざとらしく驚く声はうすら笑う色を宿している。
ほとんど白に近い薄茶の髪。白の長羽織。暗闇の中、汀の姿がぼうっと浮かんで見えた。

彼の背後には数名つき従う者がいた。皆、白の長羽織姿だ。
「光栄です、よ。――如月の、次男殿」
笑う気配がした。悪寒が背を這う。
紫呉は護焔隊を見据え、牙月を握る手に力を込めた。
血のにおいが鼻腔を突いた。

14　腥の森　1

頬に跳ねた男の血が頬を伝う。唇に流れきたそれを舐め取れば、じわりと腥さが口中に広がった。

五人だ。足元に転がる遺骸を抜いて、五人。夜闇に濡れた森の中、長羽織の白がさやさやと微風にはためく。

朽葉を踏む湿った音がした。それが合図となった。護焔隊の面々は抜刀し、こちらに駆けてくる。

紫呉は彼らに背を向けて走りだした。背を預けられる場を探さなければいけない。囲まれると厄介だ。

とはいえ森の中だ。そうそう壁になるものなどない。追ってくる足音に意識を向けながら、紫呉は壁の役目を果たせる樹を探す。

それとも上か。樹上に身を隠し撹乱する方が得策か。何にせよ、囲まれてはいけない。一人ひとりを誘い込まねばなるまい。

土を蹴る足音。木々のざわめき。短く跳ねる呼吸音。汗の滲んだ肌を撫でる風がひやりと冷たい。

ひゅ、と風を切る音が背に迫る。紫呉は鞘でそれをはたき落とした。眼前の茂みに小刀が埋もれて落ちる。

追いつかれたか。舌を打つ。紫呉は鞘を腰に差し、土を蹴り上げた。舞った土に、男は一瞬の躊躇いを見せた。

その隙に距離を詰め、首を掻き斬る。噴き出す血しぶきを浴びる前に、身を翻した。残った者達が迫る気配がする。

体が熱い。呼吸が浅い。血潮のにおいに肌が泡立つ。

（あと四人）

逃がすわけにはいかない。悉く弑す必要がある。

汀は言っていた。如月の次男だと。それを他の護焔隊の連中に知られたからには、彼らを生かしておくわけにはいかない。

木の根に足を取られた。あ、と思った時にはすぐ眼前に幹が迫っていた。腕で衝突を和らげる。

体の重みを受けた腕の骨がじくじくと痛む。荒い息を飲み込み、紫呉は樹を仰ぎ見る。良い枝ぶりだった。

地を蹴り、幹を蹴り、一気に樹上までのぼった。襟巻きを引き上げて口元を覆う。荒い呼吸を押さえて隠した。

枝の上、気配を殺す。枝に刺した牙月を抱え込むようにして身を縮めた。懐に手を突っ込む。

取り出した小刀の鞘を払った。何やら腕がぬるつくと思えば、血が流れていた。先程幹に衝突した時に皮膚が裂けたか。

袴になすりつけて血を拭う。次いで首を軽く振って襟巻きをずらし、小刀を咥えた。小刀の鞘をぐっと握る。

牙月を枝から引き抜き、柄に口づけを落とした。紫呉の腕から流れ落ちた血を受けて、牙月はまるで尾を振るように刀身を輝かせる。

ざくざくと土を踏む音が迫り来る。額を伝い流れる汗が目に入り、紫呉は強く目を瞑った。そのまま、意識を研ぎ澄ます。

一番ゆったりとした足音は、おそらく汀のものだ。最後尾を、駆けるでもなくゆっくりと歩んでいる。

汀の側に一人。前方には二人。その二人が駆け巡りながらこちらを探っている。走り、時に止まり、紫呉を探している。

ゆっくりと目を開けた。前方の二人は目視できる程に近づいてきている。汀ともう一人の姿はまだ見えない。

呼吸を整え、小刀の鞘を振りかぶる。できるだけ遠くの茂みに投げやった。音を聞きつけ、一人がそちらに駆けていく。

もう一人はちょうど真下にいる。紫呉は牙月を強く握り、枝から跳んだ。息を飲んだ男と視線がぶつかる。

上段から振り下ろした刃は受け止められた。ギィンと高く鋭く金属音が響く。降り立ち、横に薙がれた刃を後方に下がって避けた。

着地の衝撃に足が痺れている。間も無く繰り出される男の突きが髪を掠め、チ、と微かな音を立てた。

男の口元には笑みが刻まれていた。爛とぎらつく目が痛い程に

高揚を伝えくる。紫呉は下がって、男の斬撃をただ避ける。
後方は幹だ。心の臓目がけて伸びる鋭い突きを、紫呉は跳んで躱す。突きを樹に捕らえられ、男はぐうと呻いた。
紫呉は男の首に手を伸ばした。喉仏に腿をあてがい、頭部を抱きこみ共に倒れこむ。同時に首を捻れば、ごきんとにぶい音がした。
二人、どっと地に倒れた。かびた土の香が立つ。起きるなり紫呉は男の喉を踏んで潰し、樹に刺さったままの男の刀を抜く。
それを男の腹に突き立てて、息の根を止めた。茂みを探っていた男が、異変に気付いてこちらに駆けてくる。
紫呉は咥えていた小刀を、男めがけて投げつけた。悲鳴がした。駆け、男との距離を詰める。小刀は男の肩に刺さったようだ。
男は抜こうと手を伸ばす。だが眼前の紫呉に気付き、その手を腰の刀にやった。抜き様の斬撃が襟巻きを切裂く。
切っ先は僅かに肌にも触れたようだ。喉から広がる痛みに、身の内に籠っていた熱が背筋を這い登っていく。
男の瞳に映る己は微かな笑みを浮かべているようだった。男もまた笑っている。切っ先を濡らす紫呉の血を眺めやり、唇を歪める。
距離を取る。男は刃の血を舐め取った。喉を震わして笑っている。気味の悪い。愉しげな笑いが静寂を揺らす。
男は大きく口を開けて笑みを浮かべた。裂けそうな程にがぱりと開かれた口から、唾液に濡れた白い歯が剥き出されている。
男は肩の小刀を抜いた。男の肩口からは、だくだくと血が溢れていた。長羽織が見る間に染まっていく。
ゆらゆらと男の体が揺れていた。見るからに血が足りていない。それでも男は笑い、上体をぐらつかせながらこちらに迫る。
抜いた小刀を男は投げる。しかし投擲は力無く、小刀は紫呉の背後の幹に当たってカランと虚しい音を立てて落ちた。
男は上段に振りかぶる。あはぁ、とまるで息を吐くようにして漏らされた笑みがぬるついた。
隙ばかりが目立つ。腹を断つのも首も断つのもたやすい。殺し

てくれと言っているようなものだ。
男の命は残り少ないだろう。放っておいてもそのうち死ぬ。だがさっさと殺すべきだ。追いつかれる前に。敵が増えれば厄介だ。
さてどうする。
どう斬る。
あと何人だ。
さあ来い、全員消してやる。
「愉しそうだ、ね」
ふいに、笑んだ声が闇に滲む。
「ようやく追いついた、よ」
そう言いながらも、汀の佇まいに急ぎ慌てた様子は無い。
男はぴたりと動きを止め、汀を振り返った。紫呉もまた、構えていた牙月を下ろす。
「ねえ、次男殿」
懐手を組んだまま、汀は土を踏みしめて男の側に寄った。その側にはもう一人男が付き従っている。
「今、きみが考えていた事を当ててあげよう、か？」
汀は傷を負った男の肩に、ぽんと手を置いた。途端に男はがくりと崩れる。呆けたその顔に浮かぶ表情は、安堵にも落胆にも見えた。
紫呉は三人に目を据えたまま、じりじりと後ずさる。そのうちに、背中にどんと幹が触れた。
「あと何人だ」
す、と背が冷えるのを感じた。
「どうやって斬れば良い」
何かが踵に触れる。先程男が投げた紫呉の小刀だった。
「……違う」
「どうすればうまく斬れる」
「……違う」
「違わない、でしょ？」

笑みを含ませ、汀は言った。
紫呉は屈み、小刀を拾う。冷たい汗が背を流れ落ちていく。
ゆるく首を振って汀の言葉を否定するも、それに被せるようにして汀は言う。
「違わない、よ」
愉悦に濡れた笑み声が絡まりつく。紫呉は首を振り、違うと吐息で言葉をなぞる。
絡む声に四肢の自由を奪われるようだ。強張る体も、冷えた指先も、ひたすらに厭わしい。
ただとにかく否定したくて、紫呉は手にした小刀をがむしゃらに投げた。
汀は傍らに蹲っていた男の腕を、ぐいと引いた。
立たせた男の胸に、小刀が突き刺さる。え、と男は小さく声を漏らした。疑問符を浮かべ、小刀の刺さる己の胸元を見おろす。
「違わない」
手を離せば、糸が切れたようにして男はずるりとその場に崩れた。尚も浮かぶ疑問符を視線に乗せて汀を見上げるが、笑みを浮かべた汀はこちらを見るばかりだ。
やがて男の目から、光が失われた。
「違わない」
汀は繰り返す。足元に死した部下の亡骸には目もくれず、汀はただただ、こちらを見ている。
「ぼくには分かる、よ」
くすくすと、小さな笑いが耳朶をくすぐる。
「だってきみは、ぼくとよく似ている」
ざあ、と風が大きく森を揺らした。

15　腥の森　2

馬鹿を言うな。
そう叫んだつもりだった。
だがその声は、小さな喘ぎにしかならなかった。
馬鹿を言うな。似ているものか。
言葉にならぬ嫌悪が喉の奥で暴れている。
「どう違うの、かな」
汀は屈み、男の胸に刺さった小刀を抜いた。手の中で玩びながら、じわじわと距離を詰めてくる。
「どちらにせよ、彼は死んだ。この肩の傷。致命傷だよ、ね。ぼくが彼を使わずとも、きみが、彼を殺した」
汀は小刀をぽいと捨てた。土に落ち、軽く間の抜けた音を立てる。
「きみは、彼がどう死ねば、納得するの、かな？」
落ちた小刀を高下駄で踏みやり、汀はことりと首を傾げて微笑んだ。
一歩一歩、ゆったりと汀が近づいてくる。近くなる声に、気配に、紫呉はじりじりと後ずさる。
「ぼくもきみも、人殺しである事に変わりはない、でしょ？」
後ずさる手のひらに何かが触れた。先程紫呉が殺した男だった。ねじれた首、泡を垂らす口。かっと見開かれた目に、震える紫呉の姿が映りこんでいる。
紫呉は奥歯を強く噛みしめた。
男から目を背け、紫呉は立ち上がった。男の腹に刺さったままの刀を抜き、後方へ捨てやる。
汀に牙月の切っ先を向けた。頬を髪が撫ぜた。おかげで己が首を振ったのだと気がついた。汀の言葉を否定したいのか。否定できるはずもないのに。詮の無い。

噛みしめた歯の隙間から息が漏れる。
そうだ。汀の言う通りだ。
己は人殺しだ。知っている。分かっている。汀が男を盾にせずとも男は死んだ。己が殺した。
だけど。
それでも。
（同じであるはずがない）
こんな。部下を盾にする男に。似ているはずなど。
く、と汀が喉を鳴らした。
「ふ、ふふ、ふふふふ」
背を丸め、汀は笑う。手のひらで顔を覆い、肩を揺らしている。
「驕慢だ、ね」
顔を上げた汀の目が、紫呉を射た。
「そして幼い。己は人殺しだと認めたつもりでいる。そのくせ否定したい。わがままで、幼く、驕慢だ」
かちかちと歯が音を立てている。頬を伝った汗が首に流れ、傷にじりりと熱く染みた。
噛みしめた奥歯が、ぎりと鳴る。
（揺らぐな）
こんな言葉に。
分かりきっていたはずだ。汀の言葉は、ただの真実だ。
「良いことを教えてあげる、よ」
汀はニタリと笑い、紫呉の側の遺骸を指先で示した。
「彼の妹はね、婚儀を控えていたんだ。ああ、ひどく首がねじれているね。かわいそうに、ね」
思わず見おろしたねじれた遺骸は、光の無い目で紫呉を見ていた。
「彼は、確か恋人とじきに婚約すると聞いていた、かな」
汀は側に転がる男を見おろした。お前がとどめを刺したのだろうと、喉元までせり上がる言葉を紫呉は飲み込む。どろりと紅く濡

れた男の肩口が、夜闇にも鮮やかだった。
「かわいそうに、ねえ？」
ひどく愉しげに、汀は笑う。そして、側に立つ男の肩を、両の手で軽く叩いた。
「さあ、彼を排除するんだ。上手にできたら、ご褒美をあげる、よ」
男はこくりと深く頷いた。追い詰められたかのような目が暗く光っている。
男はゆっくりとした動作で刀を抜き放った。一つ息を吐き、地面を蹴る。
横薙ぎの斬撃が風を生み出す。まだ若い男だ。二十ほどだろうか。
呼吸を押し殺して繰り出す斬撃に隙は薄い。訓練を重ねた戦法だと感じ取れた。
切っ先が目を狙って伸びてくる。男はためらいなくこちらの致命傷を狙っている。
殺すつもりだ。殺すつもりで男は刃を振るっている。
己の浅い呼吸がやけに大きく耳元で聞こえた。
そうか、殺すつもりか。僕を。
熱が身体中を駆けめぐる。こめかみがどくどくと脈を打っている。
「……く、……ふ、ふふ」
汀の漏らした笑みを鼓膜が拾った。
男は一声吼えて、下段から足を払いにかかってくる。男の手首を蹴り、刀を弾いた。
男の視線が刀を追う。逸れた意識の隙を狙い、紫呉は男の胸元から腹へと切っ先を滑らせた。
男の肌を撫でる牙月は血でぬらつき、抵抗もなくやわい腹へと埋まっていく。
腹を抜け、切っ先が夜を斬る。切っ先から跳んだ血がびちゃり

と樹を濡らした。
「はは、……あっははは！」
汀は笑っている。男は膝からくずおれて、血を垂れ流す腹を押さえている。
「まだ出来る、でしょ？」
笑みまじりの声で、汀は滲んだ涙を拭う素振りを見せた。
「まだ立てる、よね？」
汀の言葉を受けて、男はぎらついた眼差しで紫呉を射る。押さえた腹からはぼたぼたと、派手に血が零れ落ちていた。
「病がちのお兄さんが、きみの帰りを待ってるし、ね？」
男は食い縛った歯の隙間から、鮮血と荒い呼吸を漏らしている。立とうともがく膝が震えていた。
「彼を始末できたら、いつもよりたくさん、お給金がもらえる、よ？」
汀が指先で示す先に立つ紫呉を、男は見た。穿つ男の視線に、思わず息を飲み込んだ。
男は血走った目で辺りを見回している。紫呉に弾かれた刀を探している。
見つからない事を知ると、男は素手のまま、よろけた足取りでこちらに向かってきた。
片手で腹を押さえ、もう片方の手をこちらに伸ばし、男は覚束ない足取りでやってくる。
紫呉は後ずさった。首を振る。漏れた声は、きっと来るなと言った。
伸ばされる手は紫呉の首を狙っている。絞めるつもりだ。死に間際しているとて、捕らわれ、そのまま引きずり倒されたら重みでおそらく呼吸はせき止められる。
来るなと掠れた声が漏れ落ちる。背を這う熱が熱い。男は殺すつもりでいる。己を。殺そうとしている。
排除せねば。殺される。生き抜くと決めたのだ。熱が。熱が背

を這う。熱い。
男の呼吸が触れるほどに、すぐ側に姿がある。熱い。熱い。
あ、と喉が音を零した。もしかすると咆哮の欠片だったのかもしれない。
紫呉は牙月を振り上げた。だが、おろせずに、そのままで動きは止まった。
「迷った、ね」
男の指先が喉に触れる。血でぬるついていた。
「迷いは、死を呼び込むよ」
男の肩越しに、汀が動くのが見えた。
至近で男が目を見開く。カッと大きく見開かれた目に、情けなく震える紫呉の姿が映っていた。
男の腹から刃が生えていた。男を貫く刃は紫呉の脇腹をも裂いた。
「どうして」
小さく発した声が揺れる。抜かれる刃と共に男は崩れた。紫呉を巻き込み倒れる。支えきれず、紫呉は男もろともに尻餅をついた。
男を貫いた刀を捨てて、汀は首を傾げる。
「何が、かな？」
さきほど紫呉が弾いた男の刀だろう。捨てやった刀にはみじんも興味をくれず、汀は細い目を笑みの形に歪めている。
「部下、だろう」
受け止めた遺骸の手は、今も紫呉の喉に触れている。まだ温かいそれがやけに気味悪くて、紫呉は男の身体をずらして伏せさせた。
ずるずると後ずさる。脇腹が痛んだ。見上げた汀は、とても愉しそうだった。
「そうだね」
喉に付着した男の血を手の甲で擦る。痛みが走る。先程、別の男の刃が皮膚を掠めたのだった。その男ももう既に死んでいる。紫呉が殺した。

「なら、どうして」
脇腹から血が流れる。痛い。
「どちらにしても、彼は、致命傷だった、でしょ？」
「でも」
「君が、ぼくを責められる、かな？」
脇腹を押さえて立ち上がる。膝が震えていた。
「君だって、彼を、斬ったじゃあないか」
傷を押さえる手を血が濡らす。熱かった。まだ生きた熱だった。
「愉しかった、でしょ？」
紫呉は首を振る。
「気持ち良かった、でしょ？」
首を振る。
違う、と声の限りに叫びたいのに、口から漏れるのは荒い呼吸ばかりだ。
「なら、それが正解だ」
汀は己の手を指輪へとやった。銀細工のそれを、ゆるゆると指から抜く。
「きみは血狂いだ」
濃い血のにおいがまとわりつく。
「ぼくと同じ、ね」
汀の声が、絡まりつく。
「ほら、餌の時間だよ」

籠星（かごぼし）。

銀細工の指輪が汀の声に応え、姿を変じる。黒鞘のそれを腰に差し、汀は柄に手をかけた。
鞘から抜き放たれた籠星が、妖しく闇に光る。いっそ軽やかなまでに紅い湾刃（のたれば）が、ぬらぬらと夜を舐めている。

「さあ、ぼくと殺し合いといこうじゃないか」

次男殿。

16　腥の森　3

背が震えた。ぬるつく汀の声が背を這い、撫で、からまりつく。
牙月を握る手に力を込める。まるですがるように。指先がひやりと冷たかった。震えている。
まざまざと、恐怖を感じている。
（何を恐れる）
何に恐怖しているのだ。死の恐怖か。
違う、これは。
汀が地を蹴った。白の長羽織が夜に閃く。籠星の紅の刃が刀風を巻き起こす。紫呉は下がって、刃から逃れた。
受け止めてはいけない。力比べとなれば競り負ける。己とて相当の力を有しているが、まだ未成熟だ。細身といえども、汀は立派な成人だ。体格差はどうしようもない。力にはやはり劣る。鍔迫り合いになれば力負けするだろう。
煌く紅から、ただ逃れる。夏の夜を裂く紅の軌跡は美しいと言っても良い。
夜闇に飲まれることもなく、汀の黒の眼が爛と華やぐ。笑みに曲げられたその黒に映りこむたび、恐怖に鷲掴まれるようである。
汀は部下の腹を、難なく背から貫いた。昼間、汀が投げた小刀は男の喉を難なく貫いた。相当の力だ。だが、ただの力任せの太刀筋ではない。相当の技量だ。力を操り、我が物にする術を知っている。人体の構造にも詳しいのだろう。筋や骨の隙間を縫って、汀は刃を貫かせている。人を殺す手段に長けている。
「逃げてばっかりじゃつまらない、よ？」
土を蹴る音、夜風に鳴く葉。荒い呼吸は、己のものばかり。汀は笑みを崩すことなく、ひたすら愉しげに刃を振るう。
八双の構えから、摺り上げるようにして刃が伸びてくる。躱したものの、二の手で返された刃が、横様から紫呉の首筋を狙い振り

下ろされた。
避ける間もなく、紫呉はその刃を牙月で受けた。ギンと高く鳴る鉄の音に、鼓膜が痺れる。ぐ、と強く押され、牙月の峰が首筋に触れた。ひやりとした鉄の感触が、肌に食い込む。
柄に両の手を添え押し返そうとするものの、腕の筋が虚しく痛みを覚えるばかりだ。汀の力に押され負け、支える脚も震えている。草履が土を掻き、ざり、と音を立てた。
脇腹から血が溢れ出るのを感じる。先程、男の身体越しに受けた突きだ。痛みが理性を侵食し始めている。血は帯で止まらず袴にまでも染み、濡れる腿が不愉快だ。じりじりと目の奥が熱く痛む。荒い呼吸が喉を焼く。脈が速い。
間近に迫った汀の目が、笑みにほころぶ。黒の瞳だ。真黒の眼。歓喜に打ち震えている。熱を感じる。愉悦を感じる。この男は悦びを覚えている。
（……同じだと？）
己と、この男が？　命のやり取りに愉悦する、この男が？
「ふざけるな……！」
言い放ったその声は掠れ、揺れていた。
籠星に更に力を乗せられる。牙月の峰に圧されるその箇所は、ちょうど先程傷を得た箇所だ。峰とはいえど、ぎりぎりと傷口に食い込んで、また新たに血が溢れて垂れる。
この刃を弾かねばなるまい。弾き、隙を作る。その隙に汀の喉を狙う。喰らいつきやすそうな喉だ。あの喉仏を裂いてやる。いや、喉じゃなくても良い。とにかく傷を負わせる。その隙に一度距離を取る。否、距離を取らずそのまま押し切るべきか。傷に怯んだその隙に、致命傷を負わせるべきか。
――今、きみが考えていた事を当ててあげよう、か？
ふと汀の声が蘇る。

――どうやって斬れば良い。
――どうすればうまく斬れる。

は、と紫呉は息を飲んだ。背が震えた。寒い。恐怖が滲む。

――きみは血狂いだ。

違う、
違う違う違う！
こんな男と、同じであるものか！
汀が笑みを深める。舌をなめずり、汀は笑う。その真黒い瞳に、己の姿が映っていた。汀を睨み据えるその目は、確かな熱を宿している。汀の眼と同じ彩りをしている。

――ぼくと同じ、ね。

「違う……！」
ふいに、首を圧する力が緩んだ。汀が刀を引いたのだ。僅かに均衡を崩したものの、紫呉は何とか踏みとどまった。
だがすぐさまに伸びてきた手に、腹を掴まれる。脇腹だ。ぐい、と傷口を親指でにじられて、声が漏れた。
伸び来る突きを、身を捩って躱す。伸びた腕を咄嗟に斬りつけようとしたものの、至近ではうまく刀を振るえない。柄で腕を払われ、鈍い痛みが走った。
何とか牙月は手離さずにいたが、足を払われてその場に倒れた。黴た土のにおいが鼻を突く。背をしたたかに打ちつけ、目が眩んだ。仰向けに倒れた紫呉の首のすぐ真横に、籠星を突き立てられる。
腹を踏まれた。潰れた声が溢れる。
「つまらない、なあ」

みぞおちに体重を乗せられて、呻きが漏れる。歯を食いしばり声を殺そうとするが、にじり動く足はやがて脇腹の傷を圧し、紫呉は悲鳴をあげた。

「ぼくはきみと、殺し合いがしたいんだ、よ。殺戮がしたいんじゃない」

足を退けられ息をついたのも束の間、腹の上に馬乗りになられる。伸びた手は首に絡まり、呼吸を奪われた。爪の先を首筋の傷口に埋められる。にちゃりと濡れた音がした。

視界が歪む。息がうまくできない。空気を求めて口が大きく開く。まるで獣のような荒い息遣いで、紫呉は夢中で空気を求めた。

「つまらない、な。こんな簡単に死にかけてちゃあ駄目、だよ？」

汀は懐から小刀を取りだした。咥え、鞘から刃を抜く。吐き出されるようにして落とされた鞘が、紫呉の額に当たって地面に落ちた。

「きみ、さ。もしかして、自分は死なないって勘違いしていない、かな？」

ずるりと、小刀の切っ先が脇腹の傷に潜りこむ。思わず身を捩るが、逃れる術は無い。首のすぐ間近に突き立てられた籠星が、ぬるりと紅く光っている。

睨んでみても、涙に濡れた目では滑稽なだけだろう。汀は笑って、切っ先を更に奥に進めた。身を跳ねさせる紫呉に体重を乗せ、動きを殺す。

「ぼくが憎い、かな？　殺したい？　良いよ、好きにすれば良い。きみの殺意は愛でるべきものであり、厭うべきものではない」

首にまとわる腕に爪を立てる。しかし、指先はただ皮膚をゆるく掻くだけで、汀の力は緩まない。

「繕う必要は無い、よ。きみの業を、愛でようじゃあないか」

立てた爪に力を込める。笑みに身を震わす汀の振動が腹に伝わり心地悪い。腹立たしい。

汀は小刀を脇腹から退けた。

「でも」
小刀は紫呉の血で汚れていた。汀は小刀を手の中で玩んでいる。
「困った、ね。これじゃあきみ、死んじゃう、よ？」
ひゅ、と喉が鳴った。
「それが嫌なら、命乞い、してごらん？」
汀は開いた紫呉の口に、小刀の切っ先を突き入れる。血の香りが口中に広がった。切っ先でゆるく舌をなぞられる。咄嗟に舌を奥へ逃がそうとするものの、押し当てられた刃先がやわい肉を傷つけ、更に血は溢れるばかりだ。
喉に流れ来る液体に紫呉は咽た。しかし舌を這う刃先に邪魔をされ、苦しさを逃しきれない。喉にぎりぎりと手指が食い込み、息が詰まる。だらしなく口の外へ零れる液体は唾液だか血だか分からない。
痛みと息苦しさに涙が滲む。無様に漏れる声を噛み殺したいのに、口中を犯す刃に邪魔をされ、それもできない。
見おろしてくる汀の瞳は、ひどく愉しげだ。薄い唇は愉悦に歪められている。
この男に、命乞いをしろと？
汀はきっと、たやすく紫呉の命を奪ってみせる。簡単だ。この小刀を、喉に突き入れるだけで良い。首にまとわるこの手に、もっと力を込めれば良い。紫呉の首を動かして、籠星に首筋を擦りつければ良い。
たやすい事だ。迷いもせずに、汀は己の命を奪ってみせる。
紫呉は握ったままの牙月を、強く握りしめた。牙月を振り上げ、汀の胸を突けば良い。喉を裂けば良い。さすれば逃れられるだろう。
しかし、汀が紫呉の命を絶つ方が早い。動こうと身を捩った瞬間、己はきっと死んでいる。
溢れた血だか唾液だかが首にまで垂れ、傷口に染みた。小刀の峰で上顎をなぞられて身震いする。
（命乞い）

言葉を奪われたこの状態で、命を乞えと？　助けてくれ、殺さないでくれ。そう、秋波を送れとでも言うのか？

みじめだ。無様だ。だがそれも、己の弱さと愚かさに因るものだ。愚かしい。本当に、どうしようもなく己は愚かだ。

生き抜くと決めたのだ。誰を奪おうとも何を奪おうとも。奪った命に潰され這いずり進む事になろうとも。それでも、生き抜くと決めたのだ。

みじめだろうが無様だろうが知った事か。己の自尊心くらい捨ててみせろ。手繰り寄せろ、命を。生を乞え。

だが、この男に屈するべきではないと、どこかから声がする。己の魂が叫んでいる。厭っている。

この手はまだ牙月を握っている。離そうともしない。生を諦めてはいない。

抗え。まだ、抗えるはずだ。戦えと、魂が吼え猛っている。

捨てるべきは、矜持でも命でもない。惑う、弱きこの心だ。

17　腥の森　4

紫呉は口中の刃に喰らいついた。切っ先が舌に埋まり、溢れた血が喉に流れ来る。

僅かばかり、汀は驚きを瞳に宿らせた。だがそれも束の間、すぐさまに小刀を奥に進めようとした。汀の腕を掴み、刃を噛む顎に力を込め、紫呉はそれを阻む。

血だの唾液だのを嚥下するのは諦めた。垂れ流しながら、生に縋りつく。鉄臭さが喉から鼻に抜けてゆく。

身を起こそうと紫呉は腹に力を込める。汀の手を掴む指先に力を込める。睨む目に、力を込める。

汀の目に浮かぶ少しの驚きは、幾許もなく愉悦に染まった。ニィと唇を歪ませて、細い目を更に細めて、汀は悦びに喉を震わせている。

口中の刃を押し返そうとする紫呉の腕の力に対し、汀は紫呉の喉を圧する手指に力を込める。

息が出来ない。先程までの比ではない。喉骨が軋むほどの力で、汀は紫呉の喉を潰そうとしている。

眩み狭まる視界で、汀は笑っている。

あの喉だ。

あの喉に。

ふいに、汀の力が緩んだ。同時に、腹に圧し掛かる体重が軽くなる。汀が身を引こうとしたその理由はすぐに分かった。風を切って飛んできた小刀を、汀は袂で受け止めた。紫呉の喉を圧する手が外れ、急に流れ込んできた空気に眩暈がする。

「おやおや。……若君じゃあないです、か」

小刀が袂から抜け落ちる。汀の視線が、紫呉から外れる。

紫呉は汀の腕を押し返し、払いのけた。身を起こす。

この、喉だ。

喉笛に喰らいつく。ブツンと音を立てて皮膚に牙が刺さったのが分かった。口中に満ちる血のにおいは己のものではない。汀のものだ。

呻く声はすぐ側だ。溢れだした血潮が舌を、歯を、唇を濡らして、喉首に垂れ流れ胸元に吸い込まれていく。

血をすするようにして、牙を肌に突き立てる。

もっとだ。足りない。もっと、その血潮で、命で、この腹が満ちるまで。

もっと。

ふ、と空気が動くのを感じた。その次には吹っ飛ばされていた。地面を転がりながら、横腹から蹴られたのだと判断する。

「失せろ、犬」

幹に背をぶつけて止まった。息が詰まる。紫呉は上体を起こした。咳きこむ。口から零れ落ちた液体が何かはもう分からない。

紫呉を蹴りつけたその足を戻し、加羅は爪先で土を軽く叩く。

金の髪が、夜風に揺れた。息を切らし、汗を垂らし、彼は紅緋の目で己を見おろしている。

その向こう、汀が喉元を押さえていた。肩を震わせている。笑っている。白の長羽織の肩口に血が散っていた。

「ふ、ふふ」

ひそかに笑う声が聞こえる。

紫呉は立とうともがくも、上手く膝に力が入らない。四つ這い、荒い呼吸を落としながら、汀の喉を狙う。

まだ動いている。あの男は。まだ死んでいない。

まだ。

「ふふ、……っは、ははは、あっはははは！　良いね！　その目だ！」

汀は地面に刺さったままの籠星を抜いた。

「まるで獣だ！　いいや、ケダモノだ！」

哄笑が響く。

濃厚な殺気に肌が痺れる。それに応えて、腹の底から熱が湧く。
だがうまく体を動かせない。痛い。じわじわと、痛みが体を食み始める。
荒い呼吸の隙間から、ぁ、と小さく声が漏れた。牙月を握る手を、土がべたりと汚していた。己は刃を握り締めたままであった。
口中に血が香る。ヒュ、と喉が鳴って、ふいに気付く。手を汚すこれは土ではない。乾いた血だ。
咽た。ごぼ、と喉が嫌な音を立てた。口の周りがやけにぬるつく。
耳を打つ哄笑がかき消えて、代わりに視線が絡まりついた。
黒の目だ。汀の。真黒の眼。熱を宿した、愉悦に染まった、黒の色。

――きみは血狂いだ。

蘇るその声を、首を振って打ち払う。口周りを手の甲で拭うも、ただ、頬にまで血が伸びただけだった。

――ぼくと同じ、ね。

ようやくの事で紫呉は立ち上がった。二本の足で、土を踏みしめ、ゆらぐ体をどうにか支える。
ふう、と長く汀は息を吐いた。つまらなさそうだった。その目の熱は先程よりも冷めていた。
しかしその身から立ち上る殺気は変わらない。それに応え湧き上がる、この熱も。
逃れたいと、そう思った。
後ずさる。一歩一歩。ゆっくりと。首を振って。髪の先が濡れていた。血だ。
追って、距離を詰めようとする汀の歩みが止まった。

「……おや」
加羅は向陽で汀の行く手を阻む。腕を伸ばし、汀の首元に刃を向ける。
「嗅ぎまわるなら、もう少し上手くするんだな」
犬。
紫呉を見据え、吐き捨てるように言った加羅の白面に、表情は覗えなかった。
今ならば、と、紫呉は頭の片隅で考える。
今ならば、ここにいるのは三人だけだ。二人を葬り去ろうとも、見ている者は誰もいない。日生加羅を死なせても、それが己の手によるものだと、知る者は誰もいない。
（馬鹿げたことを）
この期に及んで、この身はまだ刃を振るおうというのか。
（血狂い）
秘かな嗤いを浮かべ、紫呉は二人に背を向ける。痛む体を叱咤して駆けた。ほとんどひきずるような足取りだったが、それでも駆けた。
森のざわめきも、淀む夏の気配も、荒い呼吸も、垂れる汗も、滴る血潮も、何もかもが厭わしかった。
耳の奥に蘇る、汀の声も。
見上げた空に月は見えない。ただ星ばかりが、夜空に瞬いている。

＊＊＊

と、塩の味がする。
「ねえ、若君」
汀の呼びかけに、加羅は視線で応じる。向けられた刃は尚もそのままだ。
小刀を受けた長羽織の袂には、ぽかりと穴が空いている。これではまた、仕立て直さねばなるまい。
「どうして止めるんです、か？」
「如月紫呉に関しては、おれに一任されているはずだ」
燃えるような紅緋の目が、手出しをするなと告げている。
「ぼくは、侵入者を排除しようとしただけです、よ？」
加羅は真一文字に唇を結び、じっとこちらを見上げている。
似ているなと、汀はぼんやり考えた。
まあ、似ているに決まっているのだ。加羅は息子だ。日生与四郎の一人息子。似ていないはずがない。
とはいえ、汀は与四郎が十五の頃を知らない。だがきっと、こんな姿をしていたのだろうなと思う。
僅かに癖を含むまばゆい金の髪。少しばかり肩を過ぎるほどに伸ばされたそれはゆるく一つに束ねられ、湿気を多く含む夜風にさやさやと揺れている。
汀を見上げる切れ長の目は、燃える紅緋だ。焔の色。まさに、日生の名に相応しい姿。
「若君」
ゆっくりと言い含めるようにして言えば、加羅は嫌悪感を隠す素振りも見せず、汀の喉元から刃を引いた。常態の瑠璃の数珠に戻し、手首におさめる。
加羅の呼吸は、まだ少しの乱れを残していた。珍しい事だ。それほどに急いで走り来たのだろう。
「どっちを追って来たんです、か？」
汀は喉の傷を指でなぞった。歯形の残るそこはまだ血を零している。走る痛みが悦を連れくるようだ。

「ぼくを？　それとも、彼、を？」
こちらを見上げる瞳には、少しの乱れも揺れも見えない。感情の一切を排したその目は、ただ美しいばかりだった。
絡む視線は、加羅の方が先にほどいた。汀に背を向け、来た道を戻る。
「良いんです、か？」
汀は紫呉の去った森へと目をやった。
「何がだ」
「……いいえ。何でもありません、よ」
ちらりと肩越しに視線を寄こされる。何かを言いたげな素振りだったが、結局加羅は口をつぐんだままでいた。
そうだ、部下たちを埋めてやらなければいけない。だがそれも、八重への報告が済んでからだ。
「八重様は、まだ起きていらっしゃいますか、ね？」
ご報告をしないと、ね。
そう続け、汀は加羅の隣に並ぶ。
「……それは、貴様の方がよく知っているんじゃないのか？」
ハ、と鼻を鳴らし、加羅は嘲弄に表情を染めた。
答えず、汀は笑みに唇を曲げる。加羅は歩みを進め、汀を追い抜かした。夜闇に浮かぶ加羅の背はしなやかに伸び、迷いの影など有りもしないかのようだった。
汀は指先に浮かんだ血の雫を舐め取り、まるでその背を飲みこむようにして瞑目した。
ざわと森が風に噎ぶ。
昂りは今も腹の底で啼いている。

18　光の丘

＊＊＊

闇に慣れた目には眩いほどだった。
丘の中ほどでは、あの背の高い樹が夏の風と共に歌っている。ざわと枝葉を揺らし、腕かいなを広げ、曇天の夜空を見上げていた。
まるで誘蛾灯に引き寄せられる蛾のように、紫呉はふらふらと樹を目指し、歩んだ。急な来訪に驚いて、足元を夏虫が跳ねていく。
下生えに足を取られ、転んだ。受身を取る事もできずに、紫呉はそのまま草の中に顔から突っ込んだ。
ぐしゃりと音がした。腕の下、月見草がひん曲がっている。真っ白だった花弁はひしゃげ、血で赤く汚れていた。茎はよじれ、葉も、散ってしまった。
長く息を吸い、吐く。草の香りがした。それでも纏う血のにおいは消えず、いっそ愉快ですらあった。
体のあちらこちらが痛む。何がどう痛むのかも分からない。痛みに息もうまくできなくて、涙が滲んだ。
痛いと一度認めてしまえば、もう、呑まれて仕方がなかった。痛い。舌も、喉も、手も、腕も、腹も。胸も。
（……戻らないと）
そう思うものの、体が動かない。痛い。痛い。無様だ。みじめだ。愚かだ。痛い。苦しい。重い。潰されてしまいそうだ。
だが、這ってでも、進まなければ。はやく戻らなくてはいけない。これ以上愚行を重ねるわけにはいかない。如月の血に連なる己が、玻璃の地にいたと、そう、八重に報告がいったのなら。里はどうなる。考えたくもない。
ずるずると這う。身の下で草がよじれた。花が潰れた。それでも這った。
手にしたままの牙月に戻れと念じる。だが牙月は紫呉の命を聞きいれない。カタカタと振るえ吼え、まだだもっとと叫んでいる。
ここにはもう誰もいない。斬るべき相手はいないだろう。なのにまだ求めるのか。馬鹿な犬だ。
せめて、と鞘を探る。のろのろと鈍い動きで、牙月を鞘に納め

た。
草を掴み、鉛のように重い体を前へと進める。見やった軌跡で、ひしゃげた草花が地面に伏していた。
途端に込み上げる嘔気に耐え切れず、紫呉はえずいた。引いた血の気が、ひやりと背中に落ちていく。
胸糞悪さにえずくものの、胃液すら吐き出せない。腹筋が引き攣れて腹が苦しい。口周りを汚す血液は、体内から溢れたものなのか、誰かのものなのか、それすらも分からない。
身を投げ出すように地面に伏し、痛みをやり過ごす。痛い。どうしようもなく痛くて痛くて、もう、動けない。
汚れた指先に落ちる木陰に、大樹の下まで這い進んでいたのだと知る。土を押し上げ浮かぶ樹の根に、紫呉は頬を寄せた。
遠く、野犬の遠吠えが聞こえたような気がした。このままここにいては喰われてしまう。早く、立ち上がらなければ。
動けと願ったが、指先が微かに震えただけだった。霞む視界で、牙月が揺らぐ。夜に溶けるようにして、姿を変じる。
黒の狼の姿をした牙月が、緋色の眼を光らせてこちらを見ている。牙月の周囲に揺らぐ夜が、まるで陽炎のようであった。
牙月は天を仰ぎ、一声鳴いた。長く尾を引く遠吠えに応え、あちらこちらから遠吠えが響き来る。
その意味を問う力もなく、紫呉は目を閉じた。
草花を吹きぬける風に、大樹は枝葉をかき鳴らす。夏虫が涼やかに音色を奏でる。荒い己の呼吸が耳障りだった。
この丘で、加羅はさよならと言ったのだ。
そうだ、あの時もこんな風に這い蹲って、痛みに呻いていた。
憎かった。悲しかった。痛かった。怖かった。だから、刀を手に取ったんだ。どうあっても手の届かぬ相手と分かりながら、どうしても、赦せなくて。
ただ護られているだけだった弱い自分が、赦せなくて。
そうして得る力は、ただの暴力だと分かっていたけれども。

――私の駒になりなさい。お前の牙に餌を与えてやろう。

伸ばされた兄のその手を、取ると決めたのは己だ。

すがるように、手を伸ばしたのは己だ。

――良いか。黒器を手にするって事は、常に人殺しの道具を持ち歩くって事なんだぞ。その気になりゃあ、いつでもどこでも誰でも殺せるって事なんだぞ。

そうですね、翔兄。あなたは何度も、僕を諌めてくれたのに。

――お前は本当に抗いきれるか？　人の血のにおいに、肉を断つ感触に、その愉悦に抗いきれるのか？

最初は、怖くてたまらなかったんですよ。肉のやわさも、骨の硬さも。

知っているでしょう、ねえ翔兄、怯えて、僕は何度もあなたの懐に逃げ込んだ。

あの怖さを、忘れてはいけないはずだったのに。

――覚えておけ。怒りに呑まれるな、恐怖に呑まれるな、悦楽に呑まれるな。怒りも恐怖も悦楽も捻じ伏せて支配しろ。

ごめんなさい翔兄。僕は、はいと頷いたはずなのに。

まだ、腹の奥で熱が疼いているんですよ。

もっと、って。足りない、って。馬鹿みたいに。

もう、動けないのに。

戦える己で在りたかった。強くなりたかった。己の弱さも捻じ伏

せられるほどに、強く在りたかった。
そう、願っていた。
――きみは、彼がどう死ねば、納得するの、かな？
――ぼくもきみも、人殺しである事に変わりはない、でしょ？
ああ、そうだな斉藤。
僕は、己は人殺しだと、認めたつもりでいたよ。
それでも奪った命を背負って、背負い抜いて、這い蹲ってでも生き抜くと。
何回も、何回も何回も、覚悟を重ねて。認められたつもりになっていたよ。
ああ、そうか。お前を恐れた理由が分かった。
お前と同じ彩りが怖かったんだ。
同じ黒を宿したその目が。同じ昂りに濡れるその黒が。同じ熱と戯れるその黒が。
その目に突きつけられてしまうのが。その目に暴かれてしまうのが。
怖かったんだ。

近づく気配にゆるゆると目を開ける。草を踏み分ける獣の息遣いが聞こえた。野犬を従えた牙月の遠吠えが、しじまを裂く。
大樹の枝葉の隙間から夜空が見えた。流れ行く雲の切れ間に、星が光る。大樹の隙間に瞬く星明りがまるで、果実のようだ。
ごぼ、と喉が嫌な音を立てた。口から溢れ出た鮮血が頤を伝い落ち、身の下で潰れ曲がった月見草へと零れていく。
――ドンカを知っているかい、紫呉くん。
いえ、知りません。何ですか？

――ドンカはね、ドングリの精なんだよ。白くてふわふわしてるんだ。掴まえたら、幸せを運んでくれるんだって。

へえ……。加羅は物知りですね。ふわふわ。ふわふわか……。

――でも、掴まえた人はまだ誰もいないんだってさ。だから、おれたちが初めてになろうよ。掴まえて、里のみんなに幸せをあげるんだ。

良いですね！　でも、

「……でも、一番目には、加羅にあげます」

獣の気配はすぐそこだ。短く息を弾ませ、野犬は紫呉の顔を覗き込む。

肩を踏まれ、鼻面を押し当てられた。濡れた頬をべろりと舐められる。

「……腥い」

星空に月は見えない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5140w/

まほらに候　―綴命記第5章―

2012年1月6日23時50分発行